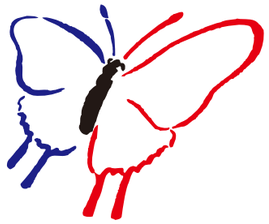


INFOS アンフォ

日仏整形外科学会広報誌

■会長……金子和夫
Président ——— K. KANEKO

■副会長……大橋弘嗣
Vice-Président ——— H. OHASHI

■書記長……藤原憲太
Secrétaire général ——— K. FUJIWARA

■会計……青木　清
Trésorier ——— K. AOKI

■書記……前田　勉
Secrétaire ——— T. MAEDA

■幹事……安永裕司　久保俊一　本間康弘　今井晋二　飯田　哲　田中康仁　星　忠行
Membre exécutif —— Y. YASUNAGA　T. KUBO　Y. HONMA　S. IMAI　S. IIDA　Y. TANAKA　T. HOSHI

■名誉会員……小野村敏信　小林　晶　坂巻豊教
Membre d'honneur — T. ONOMURA　A. KOBAYASHI　T. SAKAMAKI

■顧問……瀬本喜啓
Conseiller ——— Y. SEMOTO

■事務局：〒520-2192　滋賀県大津市瀬田月輪町　滋賀医科大学整形外科学講座（今井晋二）
Tel.（077）548-2252　Fax.（077）548-2254
Bureau : Maison d'édition: Dept. of Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science, Tsukinowa-cho Seta, Otsu, Shiga 520-2192 JAPON

■発行所：〒520-2192　滋賀県大津市瀬田月輪町　滋賀医科大学整形外科学講座（編集者：前田　勉）
Tel.（077）548-2252　Fax.（077）548-2254
Maison d'édition: Dept. of Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science, Tsukinowa-cho Seta, Otsu, Shiga 520-2192 JAPON（Éditeur : T. MAEDA）

■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp

2020.3.31
VOL. 30

INFOS冒頭のご挨拶

順天堂大学医学部　整形外科主任教授　金　子　和　夫

AFJO（Association France-Japon d'Orthopédie）について

第15回日仏整形合同会議はLuc KERBOULL会長のもと、2019年9月14日・15日に、当初の開催予定地から一転、Lyonで開かれました。小林晶名誉会長のSOFJO（日仏整形外科学会）とAFJOの設立のお話では、日仏両国の整形外科のrelationshipを再確認しました。安永裕司先生は寛骨臼骨切りの長期成績を発表されました。金沢大学名誉教授の富田勝郎先生は、オリジナル手術である“Total en bloc Spondylectomy”におけるフランス人整形外科医との関係を、時に流暢なフランス語も交えて披露していただきました。

私は、恩師の順天堂大学医学部名誉教授であり世界超音波連合終身名誉会員第1号である和賀井敏夫先生の“超音波診断法”について紹介させていただきました。きっかけは、数年前にPhilippe HERNIGOU教授が順天堂大学にある日本医学歴史博物館を見学し、展示されている世界初のバカでかい超音波診断装置に興味を持ち、AFJOでの紹介を勧められたためです（表1）。

学会前日は、ミシュランで半世紀以上三ツ星（現在は残念ですが二ツ星）を維持しているLyonが誇るRestaurant Paul BOCUSEで、約200名の参加者が夕暮れのソーヌ川の畔で素晴らしい晩餐会を楽しみました（写真1）。

●表1

●写真1

●写真2

またBEAUJOLAISでのCaveにおける試飲会では生産率1%といわれる白ワイン（Chardonnay）を初めて頂き、感動しました。その際に青木清先生と金城健先生が何度も“おかわり”されていた日本でいうサラミにあたるRosette de Lyonは生涯忘れません（写真2）。この原稿執筆中の2020年1月4日に亡くなった「ボジョレの帝王」と言われたGEORGES DUBOEUF氏を思い出します。なお2019年1月にPAUL BOCUSE氏も逝去されております。

学会では、股関節・脊椎・膝関節・足関節・肩関節・肘関節・手関節・手指・外傷・小児整形・新手法などの76演題や、交換留学報告などの興味深い発表がありました。多くの参加をいただき、深謝いたします。

また幹事会では、4年後の開催候補地にSTRASBOURGやシャンパーニュで有名なREIMSなどが挙がりました。2023年はラグビーワールドカップもフランスで開催されますので、多くのご参加を願っています。

Hip Lyon Arthroplasty学会について

私はAFJOに先立ち9月12・13日に開かれたHip Lyon Arthroplasty 2019“The STEM”に参加しました。

日本でもおなじみのC.DELAUNEY、Ph.HERNIGOU、L.KERBOULL、J.CATON、S.LUSTIG、A.FERRAIRA教授らのステムに対するトレンドや課題について、熱く討論されていました。日本からもSOFJO幹事の本間康弘順天堂大学講師が、“Stems trends in Japan”という演題で日本の新技術について報告し、多くの質問を受けていました。

SOFCOT（フランス整形災害外科学会2019）

2019年のSOFCOTは、11月11日から13日までパリのPalais des Congrèsにて例年通り行われました。HERNIGOU先生からの依頼もあり、SOFCOT-SICOT、échanges croisés sur la nécrose de la tête humérale というTABLE RONDEで、日本におけるステロイド関連による上腕骨骨頭壊死について報告させていただきました。満席状態のSALLE 353で、活発な意見交換がありました（表2）。

例年SOFCOTには日本からの参加者が少なく懸念しておりましたが、2019年には日本整形外科学会理事長の松本守雄教授も参加されました。

日本整形外科学会がSOFCOTとますます親密になることを祈念して、2020年のご挨拶といたします。

●表2

第15回日仏整形外科合同会議報告

第15回日仏整形外科合同会議（15éme AFJO）報告

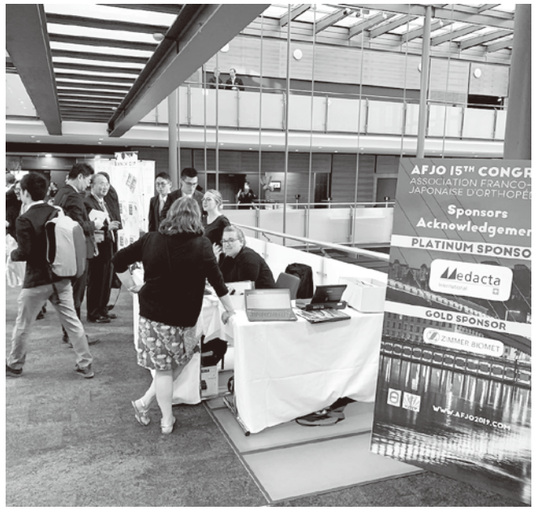
大阪府済生会中津病院整形外科　大　橋　弘　嗣

第15回日仏整形外科学会（15éme AFJO）が2019年9月14日～15日にリヨンで開かれました。リヨンの旧市街から北に外れたところにあるLyon Marriott Hotelという近代的なホテルで行われ、参加者は168名で、特別講演が4題、一般演題は74題、E-posterが6題と多くの発表が行われました。

蓋を開けて見ると盛会に終わりましたが、開催場所や開催日程がなかなか決まらず、参加された先生方には大変なご迷惑とご心配をおかけしたことと思います。少し内情をお話しします。AFJOは2年毎に開かれ、その時に日仏の役員が顔を合わせてbusiness meetingを行ってAFJOの相談を行います。今回のAFJOについても4年前に日本側からおおよその希望会期と場所を伝え、その後フランス側で検討していただき、2年前には学会長はLuc Kerboull先生、会期は2019年9月14～15日、場所はストラスブールと聞いていました。しかし、その時にLucが同時にLyon Hip Arthroplastyの会長をすることになっており、その会期がAFJOの日程と近いことが分かっていました。ここでの一番の問題点はストラスブールでの学会会場でした。場所や雰囲気のたいへん良い学会会場を予約できていましたので、フランス側もぜひここでしたいとの強い希望がありました。理想的にはAFJOの時期を少しずらしてLyon Hip Arthroplastyとは全く別に行うことでしたが、人気の会場でしたので会期の変更はできないとのことでした。LucはPhillipe Hernigou先生にも協力をお願いし、何とかこの日程でLyon Hip ArthroplastyとAFJOを続けてできるように最後まで調整をされていましたが、最終的にはスポンサーが別々の場所の両方の学会をサポートすることはできないことになり、ストラスブールを断念してAFJOをリヨンでせざるを得なくなりました。最後のぎりぎりまでLucが交渉をされていましたので、最終決定が遅くなってしまったということです。Luc先生の努力に免じてお許しいただければと思います。ただ、それにも関わらず、日本から多くの先生方に参加していただき、本当に感謝しています。

さて、学会の方は特別講演には小林晶先生、安永裕司先生、富田勝郎先生、金子和夫先生が指名され、中でも小林先生は日仏整形外科学会の歴史を初代会長の七川歓次先生を偲んで講演され、非常に感銘深いものでした。一般演題は股関節が29題と最も多く、続いて膝関節と小児整形外科が11題ずつ、脊椎が10題とやや偏りがありましたが、フランス整形外科への興味の表れと思われました。残念ながらフランスからの発表は多くなく、7割ほどは日本からの発表でしたが、フランスからは著明な先生方が参加されており、日本の先生の発表に丁寧にコメントしていただき、まさに日仏整形外科の交流が行われていたと思われました。

恒例のエクスカーションはボジョレーへのバスツアーとリヨン散策ツアーでした。ボジョレーヌーボーで有名なボジョレーのワイナリーまでバスで向かいました。ブドウ畑の中をバスは走り、ブドウの収穫風景も見られました。ボジョレーのワイナリーを訪問し、そこでワインのテイスティングの仕方を教えていただき



ました。その後、レストランに向かい、夕食会となりました。この間、フランスの先生方と英語やフランス語で会話が盛り上がり、日仏の文化交流の場にもなっていました。年を重ねるごとに日仏の先生方の間の垣根が低くなり、アットホームな雰囲気がこの学会の一番良いところだと思っています。

さらに最近では、交換研修を引き受けてくださった先生が、交換研修に行かれた先生方を食事に誘っていただいたりして、交換研修が終わった後にも親睦を深められたりもしており、参加された先生方が学会に参加すること以上に楽しくされていたのが印象的でした。

次回の日仏整形外科学会（19éme SOFJO）は2020年6月20日～21日に小松整形外科医院の星忠行先生が会長となられて札幌コンベンションセンターで行われます。そして、16éme AFJOは2021年4月5日～7日に奈良県立医科大学の田中康仁教授が会長となられて奈良で開催される予定です。多くの先生方のご参加をお待ちしています。

第15回 AFJO プログラム

《Saturday September 14th, 2019》

Invited conferences

Moderators: Alain Durandeau, Kazuo Kaneko

001 – The Early Days of SOFJO and AFJO－A Tribute to Professor Kanji Shichikawa
Dr Akira Kobayashi

002 – Rotational acetabular osteotomy for symptomatic hip dysplasia in patients younger than 21 years of age Seven- to 30-years survival outcomes
Dr Yuji Yasunaga, Ryuji Tanaka, Takeshi Shoji, Takuma Yamasaki

003 – My “Total en bloc Spondylectomy” and the encouragement I received from French doctors
Dr Katsuro Tomita

004 – Prix de l’académie du Japon décerné à : Toshio WAGAI (Professeur émérite, de l’Ecole de médecine de l’Université de Juntendo). Pour ses « Etudes sur la fondation et le développement de l’échographie »
Pr Kazuo Kaneko

Hip Session 1

Moderators: Chiaki Tanaka, Luc Kerboull

005 – Is capsular preservation necessary for DAA-THA?
Yoshiatsu Nakakita* 1, Kazuhiro Oinuma1, Yoko Miura1, Hideaki Shiratsuchi1
(1Orthopaedic, Funabashi Orthopaedic Hospital, Funabashi, Japan)

006 – Prospective Multicenter Study of 551 Dual Mobility Cups in a registry of 2090 cases
André Ferreira, Clinique du Parc Lyon (France)

007 – A new reduction technique of THA for patients with severe dysplasia and sequelae of Legg-Calvé-Perthes disease
Kazuhiro Oinuma* 1, Ayako Kurogi1, Yoshiatsu Nakakita1, Hideaki Shiratsuchi1
(1Funabashi Orthopedic Hospital, Funabashi, Japan)

008 – Bipolar hemiarthroplasty through the anterior approach: evaluation of the learning curve
Takashi Ishida* 1, Toshihisa Kajiwara2, Hiroyuki Makita3
(1Department of Orthopaedic Surgery, Yokosuka Kyosai Hospital, Yokosuka, 2Department of Orthopaedic Surgery, Yokohama Minami Kyosai Hospital, Yokohama, 3Department of Orthopaedic Surgery, Kanagawa Prefectural Ashigarakami Hospital, Ashigarakami, Japan)

009 – Acetabular reconstruction with porous metal augments for primary and revision THA
Hirotsugu Ohashi* 1, Hirotake Yo1, Tesshu Ikawa1, Yoshito Minami1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Osaka Saiseikai Nakatsu Hospital, Osaka, Japan)

010 – Target cup angle to get good range of motion following total hip arthroplasty
Hirotake Yo* 1, Hirotsugu Ohashi1, Yoichi Kose1
(1Osaka Saiseikai Nakatsu Hospital, Osaka, Japan)

Spine Session 1

Moderators: Philippe Bancel, Kenta Fujiwara

011 – The usefulness of percutaneous ultrasonography for decision making of the surgical evacuation for symptomatic epidural hematoma after cervical laminoplasty
Yoshiharu Nakaya* 1, Sachio Hayama1, Takashi Fujishiro1, Masashi Neo1
(1Osaka Medical College, Takatsuki, Osaka, Japan)

012 – Subjective and objective outcomes of surgery for postural instability in patients with cervical compressive myelopathy
Toma Yano* 1, Takashi Fujishiro1, Atsushi Nakano1, Masashi Neo1
(1Orthopedic Surgery, Osaka Medical College, Takatsuki, Osaka, Japan)

013 – The impact of the multifidus muscle swelling on C5 palsy after cervical laminoplasty
Yoshitada Usami* 1, Yoshiharu Nakaya1, Mutsumi Ohue2, Neo Masashi1
(1Osaka Medical College, Takatsuki, 2Katsuragi Hospital, Kishiwada, Japan)

014 – Hidden pathologies diagnosed after cervical surgery in patients with cervical myelopathy or radiculomyelopathy
Minako Sumikawa* 1, Takashi Fujishiro1, Toma Yano1, Masashi Neo1
(1Orthopedic Surgery, Osaka Medical College, Osaka, Japan)

015 – Ultrasonographic evaluation of the spinal cord after cervical laminoplasty in different body positions and neck postures: Relationship with neurological recovery
Sachio Hayama* 1, Yoshiharu Nakaya1, Takashi Fujishiro1, Masashi Neo1
(1Department of Orthopedic Surgery, Osaka Medical College, Takatsuki, Japan)

Upper limb Session

Moderators: Shinji Imai, Yasuhito Tanaka

016 – Prognostic Factor of Patient-rated Wrist Function after Surgical Open Repair for Triangular Fibrocartilage Complex Foveal Avulsion injury
Takamasa Shimizu* 1, Shohei Omokawa2, Yasuhito Tanaka1
(1Orthopaedics, 2Hand Surgery, Nara Medical University, Kashihara, Japan)

017 – Open scaphoid fracture with pisiform fracture-dislocation conducted initial surgery in hybrid ER - a case report -
Miho Yokota* 1, Takayuki Ebihara1, Tsuyoshi Chijiwa1, Takashi Moriya1
(1Emergency and Critical Care Medicine, Jichi Medical University, Saitama Medical Center, Saitama, Japan)

018 – A pedicle or free flap for reconstruction of upper extremity
Kosei Ando* 1, Narihito Kodama1, Yoshinori Takemura1, Shinji Imai1
(1Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science, Otsu, Shiga, Japan)

019 – Physeal Bar Resection Under Guidance with a Navigation System and Endoscopy for Correction of Distal Radial Deformities after Growth Plate Arrest
Yoshinori Takemura* 1, Narihito Kodama1, kosei Ando1, Shinji Imai1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Shiga Univesity of Medical Science, Otsu Shiga, Japan)

020 – Direct effects of herbal medicine on differentiation and apoptosis of osteoclasts
Hideo Sugimoto* 1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Kansai Medical University, Hirakata, Japan)

Hip Session 2

Moderators: Hiroyuki Makita, André Ferreira

021 – Acetabular reaming: change your mind
Jean louis Prudho, Centre Osteo Articulaire Grenoble France.
André Ferreira, Clinique du Parc Lyon France.
Thierry Aslanian, Lyon France

022 – The Effect of Obesity on Clinical and Radiographic Outcomes of a Direct Anterior Approach Total Hip Arthroplasty Using a Standard Operating Table
Ayako Kurogi* 1, Kazuhiro Oinuima1, Yoko Miura1, Hideaki Shiratsuchi1
(1Funabashi Orthopardic Hospital, Funabashi, Japan)

023 – Collarless, polished, tapered, cemented stems may cause an atypical periprosthetic fracture
Kenichi Oe* 1, Tomohisa Nakamura1, Hirokazu Iida1, Takanori Saito1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Kansai Medical University, Hirakata, Japan)

024 – Clinical outcome for the treatment of periprosthetic femoral fractures: Retrospective cohort comparison by revised arthroplasty using a cemented long stem or osteosynthesis
Hiroshi Kawamura* 1, Kenichi Oe1, Hirokazu Iida2, Takanori Saito1
(1Orthopaedic Surgery, Kansai Medical University, Hirakata, 2Hip Arthroplasty Center, Kansai Medical University Medical Center, Moriguchi, Japan)

025 – Accuracy of implant positioning in total hip arthroplasty in supine position for dysplastic hip and comparison between intraoperative fluoroscopy and mechanical device during total hip arthroplasty
Hiroyuki Furugori* 1, Akihito Oya1, Toru Nishiwaki2, Arihiko Kanaji1
(1Orthopaedic Surgery, Keio University School of Medicine, Tokyo, 2Orthopaedic Surgery, Japanese Red Cross Shizuoka Hospital, Shizuoka, Japan)

026 – Results of total hip arthroplasties in patients aged 75 years or older
Hiroyuki Makita* 1, Takashi Ishida2, Yutaka Inaba3
(1Department of Orthopaedic Surgery, Kanagawa Prefectural Ashigarakami Hospital, Matsuda, Ashigarakami, Kanagawa, 2Department of Orthopaedic Surgery, Yokosuka Kyosai Hospital, Yokosuka, Kanagawa, 3Department of Orthopaedic Surgery, Yokohama City University School of Medicine, Yokohama, Kanagawa, Japan)

027 – Does total hip arthroplasty via direct anterior approach using Dual Mobility increase leg length discrepancy compared to Single mobility?
Seiya Ishii* 1, Yasuhiro Homma1, Tomonori Baba1, Kazuo Kaneko1
(1Juntendo University Hospital, Tokyo, Japan)

028 – Direct anterior approach increases much activity level in elderly Japanese
Hatakeyama Takuto* 1, Nishiwaki Toru2, Kanaji Arihiko3, Kaneko Hironori1
(1Orthopedics, Kitasato University Kitasato Institute Hospital, Tokyo, 2Orthopedics, Shizuoka Red Cross Hospital, Shizuoka, 3Orthopedics, Key University Hospital, Tokyo, Japan)

029 – Dual mobility cups provide biomecanical advantages compared to conventional and constrained implants
Olivier Guyen

《Sunday September 15th, 2019》

Knee Session

Moderators: Tadayuki Hoshi, Michel Bercovy

030 – Yes, it is possible to adjust simultaneously Flexion Gap Balance and Femoral Rotation of Total Knee Arthroplasty with a mechanical instrumentation
Michel Bercovy* 1 1Clinique ARAGO -PARIS, PARIS, France

031 – Regulation of calcitonin gene-related peptide expression through the arachidonic acid cascade in the infrapatellar fat pad of patients with knee osteoarthritis
Jun Aikawa* 1, Kentaro Uchida1, Shotaro Takano1, Masashi Takaso1
(1Department of orthopaedic Surgery, School of medicine, Kitasato University, Kitasato, Minamiku, Sagamihara, Kanagawa, Japan)

032 – Revision anterior cruciate ligament reconstruction with a reharvested ipsilateral bone-patellar tendon-bone graft
Tadayuki Hoshi* 1, Morihiko Masuya1, Fumito Komatsu1, Mitsuru Komatsu1
(1Komatsu Orthopaedic Clinic, Hitachinaka, Japan)

033 – A comparative analysis of meniscal morphology for medial meniscus posterior root tear in the two- and three-dimensional magnetic resonance imaging
Yoshiki Okazaki* 1, Takayuki Furumatsu1, Shinichi Miyazawa1, Toshifumi Ozaki1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Okayama University Graduate School, Okayama, Japan)

034 – Knee flexion angle during femoral tunnel creation using modified transtibial technique affects femoral graft bending angle in ACL reconstruction
Tomohiro Tomihara* 1
(1Orthopaedic surgery, Shimada Hospital, Habikino, Japan)

035 – Effects of malalignment and disease activity on secondary osteoarthritis progression in knees of rheumatoid arthritis patients
Noriaki Okumura* 1, 2, Taku Kawasaki2, Kosuke Kumagai2, Shinji Imai2
(1Orthopaedic Surgery, Kyoto Okamoto Memorial Hospital, Kyoto, 2Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science, Shiga, Japan)

036 – Correlation between Rotational Alignment of the Tibial Component and Patients' Reported Outcome Score in Journey II BCS
Tsutomu Maeda* 1, Mitsuhiko Kubo1, Yoshitaka Matsusue1, Shinji Imai1
(1Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science, Shiga, Japan)

037 – Intraoperative Joint Gap Kinematics to Evaluate Stability of Reconstructed Knee in Oxford Unicompartmental Knee Arthroplasty
Shinichi Fukuoka* 1, Ryosuke Iio1, Kenji Fukunaga1, Takeharu Sasaki2
(1Adult Reconstruction Knee and Hip Service, Nishinomiya Joint Reconstruction Center, 2Department of Orthopaedic Surgery, Nishinomiya Watanabe Hospital, Nishinomiya, Japan)

038 – Accuracy and precision of a new handheld surgical navigation system for total knee arthroplasty. A 40 cases study.
André Ferreira, Clinique du Parc Lyon (France)

039 – Bioactive material for the ligament fixation of the anterior cruciate ligament. Prospective study with 75 cases.
Jérémy Cognault, Philippe D'Ingrado, Andre Ferreira - Clinique du Parc Lyon (France)

040 – Coronal alignment of custom TKA
Michel P. Bonnin* 1, Carsten Tibesku2, Jacobus H Müller3, Tarik Ait-Si-Selmi1
(1Centre Ortopdique Santy, Lyon, France, 2KniePraxis, Staubing, Germany, 3ReSurg SA, Nyon, Switzerland)

Orthopaedic medicine and research

Moderators: Philippe Hernigou, Kenichi Oe

058 – Total hip arthroplasty in cases of rheumatoid arthritis in Japan: Does medication work?
Taku Kawasaki* 1, Tomohiro Mimura2, Shinji Imai2, Yoshitaka Matsusue3
(1Clinical Education Center for Doctors, 2Orthopaedic Surgery, 3Hospital Director, Shiga University of Medical Science, Otsu, Japan)

059 – The Perioperative Infectious Management of Primary Total Hip Arthroplasty (THA) for Patients with Human Immunodeficiency Virus (HIV)
Takuya Kubo* 1, Masanori Matsuura1, Chinatsu Ohira1, Toshio Kitano1
(1Orthopaedics, Osaka City General Hospital, Osaka, Japan)

060 – Differences in pathogen profiles between cemented and cementless periprosthetic hip infections
Yosuke Otsuki* 1, Kenichi Oe1, Hirokazu Iida1, Takanori Saito1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Kansai Medical University, Hirakata, Japan)

061 – Clinical outcome of antibiotic administration for the treatment of periprosthetic joint infection: Retrospective cohort comparison by linezolid and daptomycin
Masahiro Sawada* 1, Kenichi Oe1, Tomohisa Nakamura1, Takanori Saito1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Kansai Medical University, Hirakata, Japan)

062 – The additive effect of Vitamin D supplementation on lower extremity strength exercise in Japanese patients with knee osteoarthritis: a randomized controlled trial
Hiroaki Kanazawa* 1, Hisashi Kurosawa1, Masahito Koike1, Yoshiyuki Iwase1
(1Orthopaedic Surgery, Juntendo Tokyo Koto Geriatric Medical Center, Tokyo, Japan)

063 – Endoscopic treatment for the peroneal tendon dislocation
Akeo Waseda* 1
(1Orthopaedic, Ogikubo Hospital, Tokyo, Japan)

064 – Anatomical study of pedicled vascularized fibula graft and its clinical applications in the reconstruction of distal femur
Hideo Hasegawa* 1, Takamasa Shimizu1, Shohei Omokawa2, Yasuhito Tanaka1
(1Orthopedic Surgery, 2Hand Surgery, Nara Medical University, Kashihara, Nara, Japan)

065 – Novel hyperthermic treatment for metastatic bone tumors with magnetic materials
Akihiko Matsumine* 1, Atsumasa Uchida2
(1Department of Orthopedics and Rehabilitation Medicine, Faculty of Medical Sciences, University of Fukui, Eiheiji, Fukui, 2Department of Orthopaedic Surgery, Mie University , Tsu, Japan)

Hip Session 3

Moderators: Hirotsugu Ohashi, Jacques Caton

051 – Preventing Complications is Less Effective with Incremental Dual Mobility Cup Revision
Philippe Hernigou* 1
(1orthopedic, Hopital Henri Mondor, Paris, France)

052 – Ultrasound-guided injection to extraarticular lesion adjacent to hip capsule
Takuma Yamasaki* 1
(1Dept of Orthopaedic Surgery, National Hospital Organization Kure Medical Center Chugoku Cancer Center, Kure, Hiroshima, Japan)

053 – Total hip arthroplasty after failed transtrochanteric rotational osteotomy of the femoral head
Masanori Matsuura* 1, Yoshio Matsui1, Takuya Kubo1, Noriaki Hidaka1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Osaka City General Hospital, Osaka, Japan)

054 – Clinical utility and application of digital tomosynthesis in radiological assessment of total hip arthroplasty
Masaaki Maruyama* 1
(1Department of Orthopedic Surgery, Minaminagano Medical Center, Shinonoi General Hospital, Nagano, Japan)

055 – Why a modification of the original Kerboull Cage?
Luc Kerboull, Moussa Hamadouche, Marcel Kerboull - Marcel Kerboull Institute Paris

056 – Assessment of the decrease of dislocation risk in a comparative and retrospective study of cemented revision THA with Kerboull plate using DMC VS standard cup: Mean Follow up 7 years
Jacques Caton, Chahine Assi, Kessar Yammine

057 – Regenerative therapy administrating recombinant human fibroblast growth factor-2 for osteonecrosis of the femoral head: Five-year clinical therapeutic efficacy of the first in human clinical trial
Yutaka Kuroda* 1, Toshiyuki Kawai1, Koji Goto1, Shuichi Matsuda1
(1Orthopaedic Surgery, Kyoto University, Kyoto, Japan)

Pediatrics Session

Moderators: Kiyoshi Aoki, Philippe Wicart

041 – The case of cubital tunnel syndrome in child.
Yuka Igeta* 1, Satoshi Ichihara2, Akira Hara2, Kazuo Kaneko3
(1Orthopedic Surgery, Juntendo Nerima Hospital, Tokyo, 2Orthopedic Surgery, Juntendo Urayasu Hospital, Chiba, 3Orthopedic Surgery, Juntendo University School of Medicine, Tokyo, Japan)

042 – Endoscopic Resection of Talocalcaneal Coalition in Children
Azusa Yoneda* 1, Shinji Isomoto2, Yasuhito Tanaka1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Nara Medical University, Kashihara, 2Department of Orthopaedic Surgery, Nara Prefecture General Medical Center, Nara, Japan)

043 – Mid-term results of soft-tissue release for advanced dislocation of the hips in patients with cerebral palsy
Atsushi Matsuo* 1, Akifusa Wada1, Hideaki Kubota1, Shinji Fukuoka2
(1Department of Orthopaedic Surgery, Saga Handicapped Children's Hospital, Saga, 2Department of Orthopaedic Surgery, Shinkoen Handicapped Children's Hospital, Fukuoka, Japan)

044 – Arthroscopic reduction with limboplasty for the dislocated hips presenting after walking age - radiological results and complications -
Toshio Kitano* 1, Takuya Kubo1, Chinatsu Ohira1
(1Pediatric Orthopaedic Surgery, Osaka City General Hospital, Osaka, Japan)

045 – Decreasing hospital care by early diagnosis of developmental dysplasia of the hip with ultrasound for infants
Chinatsu Ohira* 1, Ryo Hosomi1, Keisuke Nakagawa2, Toshio Kitano1
(1Pediatric Orthopedic Surgery, Osaka City General Hospital, 2Orthopedic Surgery, Osaka City University Sch. of Med, Osaka, Japan)

046 – The diagnosis prediction factor of the septic arthritis hip in children
Satoe Tanabe* 1, Hirofumi Oogiya2, Yuto Murakami2, Ryota Ito2
(1Orthopaedics, Showa Univ KotoToyosu Hospital, Tokyo, 2Orthopaedics, Showa Univ Fujigaoka Hospital, Yokohama, Japan)

047 – Two cases of primary obturator internus pyomyositis
Atsuhiro Fujie* 1, Junya Sasaki1, Kentaro Nagatani1, Kazuhiro Chiba1
(1Orthopaedics, National Defense Medical College, Saitama, Japan)

048 – Long-term outcome of chiari osteotomy in multiple epiphyseal dysplasia and pseudoachondroplasia
A. Andrzejewski, G. Finidori, A. Badina, Z Pejin Arroyo, Ch. Glorion, Ph. Wicart
Hopital Necker Paris France

049 – How to rotate the acetabulum during a pelvic osteotomy without undesirable correction?
Néjib KHOURI, Department of Pediatric Orthopaedics Necker Sick Children University Hospital

050 – Capital realignment for severe chronic SCFE using Dunn procedure. Critical evaluation of a series of 26 hips
Néjib KHOURI, Department of Pediatric Orthopaedics Necker Sick Children University Hospital

050BIS – Three-Dimensional Reconstruction of Foot in theWeightbearing
Position From Biplanar Radiographs: Evaluation of Accuracy and Reliability
Philippe Wicart

Hip Session 4

Moderators: Kazuhiro Oinuma, Philippe Hernigou

066 – Custom Hip Replacements: Reflections and results of ten years' experience
Christophe Castelain* 1
(1Department of Orthopaedics, Clinique Arago, Paris, France)

067 – The efficacy and pitfall of portable navigation in lateral position THA.
Makoto Takazawa* 1
(1Orthopedics, Kashiwa Kousei General Hospital, Kashiwa, Japan)

068 – Beneficial effects of less subsidence and demarcation in polished curved triple- than double-tapered stem at a 5-year follow-up
Hitoshi Wakama* 1, Kenta Fujiwara1, Masashi Neo1
(1Department of Orthopedic Surgery Osaka Medical College, Takatsuki, Japan)

069 – Treatment for unexpected irreducible fracture of the proximal femur, in particular, to Varus Impaction without Posterior Support type: VIPS
Masami Tokunaga* 1, Akira Kobayashi1
(1Fukuoka Orthopaedic Hospital, Fukuoka, Japan)

070 – Amistem Radiological Evaluation at 5 years of follow-up and uncemented stems review experience
Pascal Vie

071 – Periprosthetic Joint Infection in Aseptic Total Hip Arthroplasty Revision
Jean-Louis Rouvillain

071BIS – Analysis of Cementless Hip Stem Anteversion in Total Hip Arthroplasty: A comparison between Fully hydroxyapatite-coated stem and Tapered Wedge stem
Masanori Kase, Masaaki Matsubara

Spine Session 2

Moderators: Frederic Sailhan, Takashi Fushiro

072 – Multicentric prospective study on cervical spine myelopathy in France
Philippe Bancel, Clinique Arago Paris France

073 – Health-related quality of life in middle-aged Japanese women after posterior spinal fusion with Cotrel-Dubousset instrumentation for Adolescent Idiopathic Scoliosis: longer than 22-year follow-up
Keiichiro Kino* 1
(1Osaka Medical College, Takatsuki, Japan)

074 – Efficacy of Patient matched Targeting Guide of Cortical Bone Trajectory for Spine surgery -Realization of safe screw insertion and radiation-less spine surgery-
Yoshio Shimamura* 1, Shingo Onda1, Kazuo Kaneko2
(1Orthopaedic Surgery, Tokyo Toubu Chiiki Hospital, 2Orthopaedic Surgery, Juntendo University Hospital, Tokyo, Japan)

075 – Hemostasis using gauze packing and TAE following unsuccessful FloSeal hemostasis during anterior fixation in patient with contralateral ruptured segmental arterial pseudoaneurysm – a case report-
Takayuki Ebihara* 1, Miho yokota1, Takashi moriya1
(1Emergency and Critical Care Medicine, Jichi Medical University, Saitama Medical Center, Saitama city, Japan)

076 – Comparison of postoperative outcomes following Minimally Invasive Surgery – Transforaminal Lumbar Interbody Fusion (MIS- TLIF) using Trabecular Metal cages and PEEK cages
Takeshi Ohki* 1, Isao Ohki1, Kentaro Nakamura1, Satoko Ohki2
(1Orthopedics, 2Rehabilitation, Yuki Hospital, Yuki, Japan)

ABSTRACTS AND E-POSTERS

P001 – Full-endoscopic spine surgery for lumbar disc herniation with canal stenosis. Full-endoscopic lumbar laminoplasty + discectomy (FEL+D) vs Full-endoscopic lumbar discectomy (FELD)
Katsuhiko Kikuchi* 1, Koichi Yoshikane1
(1Orthopaedics, Kitakyushu Municipal Medical Center, Kitakyushu, Japan)

P002 – A case of spontaneous spinal epidural hematoma managed conservatively
Risako Yamamoto* 1, Shozui Takemoto1, Shigeo Joji1, Mitsuru Motoyama1
(1JA Yoshida General Hospital, Akitakata, Japan)

P003 – Pathological anatomy and results of the modified Green procedure of Sprengel deformity
Akifusa Wada* 1, Atsushi Matsuo1, Mayuki Taketa1, Hideaki kubota1
(1Department of Orthopaedic Surgery, Saga Handicapped Children's Hospital, Saga, Japan)

P004 – Our Petite Experience of Dual Mobility Articulation in Primary or Revision THA
Toshihisa Kajiwara* 1
(1Orthopaedic surgery, Yokohama Minaikyousai Hospital, Yokohama, Japan)

P005 – The MRI study of the multifidus muscles after laminoplasty or laminotomy for lumbar canal stenosis
Hidehisa Torikai* 1
(1Department of Orthopedic surgery, Chibaken Saiseikai Narashino Hospital, Narashino city, Chiba, Japan)

P006 – Third bodies of alumina on articular surface after metal-on-metal total hip arthroplasty make adverse reaction of metal debris, which were released from blasted metal insert: case report
Toru Yamakawa* 1
(1Dept.of orthopedics, Japanese Red Cross Ise hosp., Ise, Japan)

2019年度フランス短期留学帰朝報告
～My challenge in Versailles～

岡山大学整形外科
岡 﨑 良 紀

私は、令和1年9月1日から11月末までの約3ヵ月間、日仏整形外科学会交換研修制度を利用してフランス・ベルサイユにあるAndré Mignot Hospitalで研修を行いました。研修先では、膝関節外科を中心に様々な症例を見させて頂いた上、臨床研究もさせてもらい大変有意義な研修になりましたので、御報告させて頂きます。

フランス留学開始まで

私は、岡山大学大学院において「膝関節グループ」に所属しており、これまで前十字靭帯(ACL)損傷、半月板損傷に関する臨床研究・基礎医学研究を行ってきました。私は、Philippe Beaufils先生とNicolas Pujol先生が中心に執筆された「The Meniscus」という洋書を参考に論文執筆をしていたため、彼らがいるベルサイユに是非とも行きたいと思っておりました。青木清先生に留学希望をお伝えし、日仏整形外科学会の皆様に紹介して頂き、無事留学試験に合格しました。実際に研修する方法がわからなかったのですが、大阪医大の大槻周平先生が日本人で唯一研修したことがあり、大槻先生に連絡して頂き、念押しで二人で2019年2月に「The Meniscus」というヨーロッパの学会へ参加し、直接交渉することにより私の留学が決定しました(写真1)。

André Mignot Hospitalでの研修

Mignot Hospitalは、ベルサイユ中心部より、バスに乗車して15分ほどいったベルサイユ宮殿を見渡せる小高い丘にあります。この病院は、内科、外科、小児科および救急センターを持つpublic hospitalであり、日本の大学病院と同様に学生および研修医を多く受け入れている病院です(写真2)。整形外科における膝関節部門は、パリを含むイル・ド・フランス地区における症例数と患者満足度No1の称号を得ています。現在，Beaufils先生は定年退職し、愛弟子である若きPujol先生がチーフとして働いております。その他各専門分野にスタッフは5名、レジデントが11人おり、年間3,500例を超える手術を行っております。肩関節、股関節、足部の手術も見学できる上、救急外来には、ひっきりなしに外傷・骨折の患者さんが来院しており、多くの外傷手術も見ることができます。整形外科の医局は、最上階にありますが、関節鏡を発明した渡邉正毅先生の写真が貼られており、皆が医局を「Salles WATANABE」と呼んでおり、異国の地で毎日勇気を与えてもらいました(写真3)。

毎朝、8時よりカンファレンスが医局で行われますが、レジデントが前日に対応した救急患者のプレゼンテーションを行います。画像を提示しながら、皆で情報を共有し、to do listを作成していきます。骨折であれば、基本的に即日手術の方針とし、カンファレンス後すぐに患者さんに連絡を行い、素早く手術の段取りを行っていきます。フランスの医師は書類仕事が少なく、スムーズに手術開始まで至っていました。また週1回金曜日には、翌週の予定手術の症例カンファレンスが行われていました。学生とレジデントが、日本と同様に画像と原稿を用意し、プレゼンテーションを行います。その際、上級医は細かくチェックし、例えば前十字靭帯(ACL)再断裂であれば骨孔の位置はどこが正しいかなどを突っ込み、後輩を教育しておりました。カンファレンスが終わると毎日、病院内にあるCaféに皆でコーヒーを飲みに行き、談笑を交えて楽しく会話した後、仕事に向かうというフレンチスタイルであり、風通しの良い職場だと感じました(写真4)。

私は主にPujolに付いて膝関節の研修を行いました。月曜日は、朝から夕方まで外来業務に携わり、彼らの患者への挨拶・握手から始まる紳士的な対応に感銘を受けつつ、主にパリ近郊から紹介される難治症例に対する彼らの方針を学ぶことができました。火曜日から金曜日までは手術の助手として働き、多くの症例を経験することができました。彼らは、Beaufilsから受け継がれたVersailles methodを大切にしており、多くのレジデントがmethodを習得しようと研鑽を積んでおりました。Versailles methodの代表的なものには、小皮切で行うBTBを用いたACL再建術、膝蓋骨反復性脱臼に対するTrochleoplasty、半月板水平断裂に対するOpen meniscus repairなどがあり、私も習得するべく手術に参加しました。その他、半月板欠損例に対する人工半月板移植術や同種腱を用いた複合靭帯損傷など日本では経験できない手術を見ることができ、写真をとり貴重な記録として残すことができました。

余談になりますが、彼らは、8時から18時ぐらいまで働き、引き継ぎを済ませて、早く帰っておりました。しかし、オンタイムの集中力は高く、プロフェッショナルとして給料をもらっていることに強いプライドを

●写真1　大槻先生と参加したボローニャで開催された「The meniscus」において、Beaufils先生と(左)、Pujol先生と(右)

●写真2　André Mignot Hospitalの外観

●写真3　医局の前に飾られている渡邉正毅先生

●写真4　朝カンファレンス後のcafé time。濃いespressoが目覚めさせます。

持っているようでした。最近言われている「働き方改革」ですが，労働時間だけでなく、仕事の質と成果にも注目されるべきだと思います。そして、彼らのようにバカンス(3ー4週間あります)をエンジョイすることも大事だと感じました。

臨床研究

研修が1ヵ月過ぎた頃、私は何か臨床研究がしたいとPujolに主張しました。すると、彼が今行っているUKAのsystematic reviewを手伝ってほしいということと、navigationを用いたTKA術後の脛骨回旋の分析を提案されました(**写真5**)。もちろんやりますと答えましたが、そこから試練の始まりでした。まず、systematic reviewですが、これは、両膝同時UKAの安全性および費用対効果に関するものでした(写真6)。予め、彼が文献を抽出してくれていましたので、そこから術後合併症・下肢静脈血栓症の発生率、出血量、再置換率、全入院期間と費用を調査しました。Reviewは初めてでしたので、参考文献を貸して頂きましたが、予想以上に骨の折れる解析でした。家では気が滅入るので、パリのカフェや図書館に行き、作業を続けることで、なんとか仕上がり、2nd authorとしてJournal of ISAKOSに投稿することができました。

また、Mignot病院では、navigationを用いて正確なインプラント設置を心がけており、大腿骨の回旋はnaviで決定し、脛骨は、解剖学的形状を有する脛骨トレイを骨切り面に適合させ、被覆の良い箇所に設置しておりました。したがって、もう一つの研究は、脛骨トレイの骨切り面の適合性と脛骨回旋との関係になりました。術前・術後CTが揃った症例を100例以上チェックしました。フランス語で書かれた電子カルテから情報を抽出するというこちらも骨の折れる作業でした。同僚、秘書さん等の助けを借りながらなんとかフランス滞在中にデータ収集ができました。そして、脛骨骨切り面の後方縁に沿って解剖学的トレイを設置すると、大腿骨位置との回旋ミスマッチが減り、正しい回旋に導くことが可能という結論が得られました。こちらは、first authorとしてKnee Surgery, Sports Traumatology, Arthroscopy(KSSTA)に投稿することができました。2本の論文を書ききったことで、強い達成感が得られました。

●写真5　手術室にてPujol先生と

●写真6　両側同時UKA。Pujol先生の手術を見ながら、レジデントも執刀するスタイル

Versaillesでの暮らし

私は、妻とAirbnb(エアービーアンドビー)という民泊システムを利用して、アパートを借り、ベルサイユに3ヵ月間住みました。ベルサイユは、世界的観光地でありながら、治安もよく、非常に住みやすいところでした。ベルサイユ宮殿の庭は無料で入ることができるため、いつしか私のランニングコースになりました(**写真7**)。生活圏内では、車を運転する必要はなく、Navigoというweekly passを購入しておけば、全てのバスと電車が利用でき、スムーズに乗り換えができるため、大変重宝しておりました。そして、電車を利用し30分ほどでパリに行けました。週末などには、パリ観光およびパリ経由で遠出をしたり、サッカーやテニスなどのスポーツイベントを観戦するなど、楽しい日々を過ごすことができました。

フランス生活で、特に学んだのが挨拶とマナーです。フランス人は、出会うと、ボンジュールと笑顔で挨拶をしてくれます。フランスで生きていくには、気持ちよく挨拶することが重要です。私は、結局フランス語による会話はほとんどできませんでしたが、挨拶をきちんとすることで、続く英会話や自分の主張などが通るように感じました。また、フランス人は、レディファーストはもちろん、高齢者への譲ることや、扉を開ければ後ろから来る人を待ってあげるなどの小さなマナーが皆出来ておりました。個人主義の国でありながら、他者に優しく接するのがフランスだと認識しました。そして日本人も見習わなければならない点が多いと感じました。

困ったこともありました。まずは、ストライキとデモの多さです。労働者の権利ということで、イエローベスト運動などの大規模デモが月に1回ほど起こり、観光どころではない日もありました。バスも電車も時間通りに来ることはなく、突然運行休止になることがあり、9月にリヨンで開催された日仏整形外科学会へ出発の日、予約していたTGVに乗れないという事態にも陥りました(**写真8**)。また、フランスには、コンビニがなく、スーパーも休日には閉まるため日常生活に不便さを感じることがありました。平日中に食材を買い込んで、計画的に自炊をしなければならないのですが、結果的に約5kg痩せました。逆に日本では、いつでも買い物ができるのは良いのですが、不要な食べ物が溢れ、健康を害している可能性があり、帰国後の生活を見つめ直すいい機会になりました。また，個人的なことですが、虫歯になり、大変苦労しました。硬いフランスパンを食べて歯がかけてしまったのがきっかけですが、そこから虫歯になり、夜も眠れないほどの痛みになりました。パリで評判の歯医者に行き、歯神経の治療もしてもらったのですが、麻酔の効きが甘く、悶絶するほどの痛さでした。これから留学される方は、歯科治療を終了しておくことを強く推奨します。

最後に

フランス留学を通して、素晴らしい経験をさせてもらったのと、「欧米から見た日本」を感じることが出来ました。また、海外の先生または同年代の医師と知り合いになり、自分の知識不足など足りない部分を自覚するとともに、成長もできたと思います。この経験を生かして、気持ちを新たに心機一転、頑張りたいです。

最後になりますが、渡仏の機会を与えて頂いた金子和夫会長、交換研修係の大槻周平先生と青木清先生、さらにフランス滞在中に情報共有して頂いた前田勉先生をはじめ多くの日仏整形外科学会の先生方、そして、大学院在籍中にも関わらず快く送り出してい頂いた尾崎敏文教授に深く御礼を申し上げます。そして、Nicolas Pujol先生をはじめフランスでお世話になった先生と仕事上での関わりを継続し、今後の学会の発展に貢献できればと思います。

●写真7　ベルサイユ宮殿での早朝ランニング

●写真8　リヨンで開催されたSOFJOで、膝関節で有名なSonnery-Cottet先生と。左から青木清先生、岡田雄二先生、筆者

フランス留学帰国報告

みやぎ県南中核病院整形外科
金 澤 憲 治

平成31年度日仏整形外科学会の交換研修に志願し、5月中旬より7週間フランスで研修してきたのでご報告いたします。

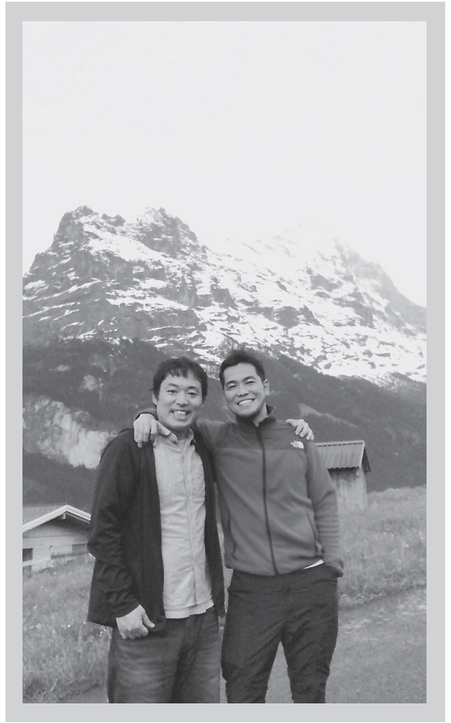
私は日頃肩関節分野を中心に診療しております。以前、Annecy（Annecy live surgery）、Nice（Nice shoulder）と肩関節関連のイベントでフランスを訪れる機会がありました。その中で鏡視下手術や人工関節の手術手技やデバイスの工夫、新しい治療法など、先進的な取り組みも紹介され、世界の著名な肩関節外科医のトレンドを知ることが出来ました。その中でも、フランスの先生方の発想、技術や臨床データの量産体制の凄さに驚きました。一方で、日本に反転型の人工肩関節であるReverse shoulder Arthroplasty（RSA）が導入されて5年目に入りました。私自身RSAの執刀医の資格は持つものの、未だ経験が少なく、難しい症例に対してまだ自信を持って臨むことはできませんでした。RSA発祥の地であるフランスではその歴史も長く、安定した成績、難しい症例に対する治療戦略、ピットフォールに陥らない工夫など生で手術手技を見たいと考え、フランスへの交換留学に志願した次第です。Lyon、Annecy、Niceに滞在し、研修してまいりました。

Lyon

まず最初にLyonに2週間ほど滞在し、反復性肩関節脱臼に対するOpen Latarjet法で有名なGill Walch先生の施設（Centre Orthopédique Santy、Hopital Privé J Mermoz）を見学させていただきました。残念ながらWalch先生は火曜日の午前中のみ手術をされており、直接見る機会はありませんでしたが、後継者とされるNeyton先生について外来、手術を色々見せていただきました。手術では、実際に助手として術野に入る事ができました（写真1）。Neyton先生の手術手技は非常に丁寧で、血管の処理からレトラクターの設置位置、関節窩の展開、烏口突起の固定まで細かく教えていただき、今までの苦手意識が払拭されました。また、オリジナルのデバイスや普段使っている装具も紹介してくれました（写真2）。

●写真1　Neyton先生による反復性肩関節脱臼の手術（Open Latarjet法）。左からNeyton先生、私、フランス人fellow（Vansan）

●写真2　術後肩外転外旋位で固定する装具を装着しているNeyton先生



●写真3　平川先生とスイス遠征し、Grindelwald、Chamonix-Mont-Blanc、Zermattの山々を周遊

休日も重なったため、手術日が数日潰れてしまいましたが、2週間の滞在の間に腱板修復術5例、Open Latarjet法3例、人工肩関節全置換術3例、その他3例を見学することができました。期間中、大阪市大の平川義弘先生、東京医科歯科大学の植木博子先生ともご一緒でき、大変有意義で楽しい研修となりました。平川先生とはオフの日程でスイスの山々を巡る小旅行もしてきました（写真3）。日本での生活を忘れて、これほどまでに充実した時間を過ごしてよいのだろうかと思いながら、しっかり満喫して来ました。

Annecy

Annecyでは2年に1度催されるAnnecy Live Surgeryに参加してきました（写真4）。世界中から著名な肩関節外科医がライブ手術を行うコースです。今年は3日間で36症例の手術が行われました。前回のコースと比べて、主催者のLaurent　Lafosse先生のご子息Thibault Lafosse先生の露出がだいぶ増えていて、世代交代を意識した構成なのかと勝手ながら想像しました。馴染みのない手術や初めて見る術式もあり、非常に興味深く有意義な3日間でした。様々なLatarjet法も一挙に見る事ができた事も良かったです。Lafosse先生の病院見学をこの日程に組みたかったのですが、人気があり日程調整できず残念でした。

●写真4　Annecy live surgeryにて

術もたくさん見る事ができ、特にお家芸のBony Increased offset（BIO）-RSAを生でみて、その経過を外来で確認することができたのは貴重な経験になりました。色々疑問に思っていた事も解決したので、日本でチャレンジしてみたいと思います。最後にサービスショットを撮っていただきました（写真6）。ニースでは、腱板修復術9例、鏡視下Latarjet法9例、人工骨頭置換術全置換術RSA5例、Revision RSA5例、上腕骨近位端骨折3例、その他11例を見学することができました。

●写真5　Niceのfellowと一緒に。左からチリ、アルゼンチン、日本（私）、インド

Nice

Niceには4週間滞在し、世界的にも有名なPascal Boileau先生のいるHospital Pasteurを見学させていただきました。私の滞在中の手術のほとんどはBoileau先生が執刀しておりました。世界中からのfellow（写真5）のほかフランスからのレジデントも来ており、助手で入るチャンスはほとんどありませんでしたが、手術のたびに丁寧に説明してくれ、さらにシャッターチャンスの際にはわざわざ手を止めて教えてくれました。毎週木曜日には鏡視下Latarjet法が数件組まれており、鏡視下Latarjet法目当てに海外からの見学者が来ておりました。また、金曜日には時々大学病院で鏡視下Latarjet法のキャダバートレーニングが行われ、その講師をドクターではなく手術室看護師が務めていることに驚きました。RSAを含む人工関節置換術や再置換

●写真6　関節鏡を片手にPascal Boileau先生と

クリニックでは術前、術後にかかわらず、様々な患者さんの診察を拝見しました。それぞれの患者の治療方針や手術法の選択の仕方などについて議論する時間を設けてくれ、非常に勉強になりました。特に思うところがあるのか、アメリカからの見学者が来た際には特に熱の入った議論になっていました。

さいごに

約7週間、日本を離れ無事フランスで肩関節外科の研修を行うことができました。このような貴重な機会を与えてくださった日仏整形外科学会の役員の先生方、施設・日程のマネージメントをしてくださった水野直子先生（Lyonではごちそう様でした！）に厚く御礼申し上げます。また、渡仏を快諾してくださった東北大学整形外科の井樋栄二教授、みやぎ県南中核病院の下瀬川徹企業長、内藤広郎院長、病院のスタッフの皆様にも感謝を申し上げます。この交換研修の更なる発展を願い、学会の一員として協力させて頂ければと存じます。今回得られた貴重な経験を、日本の臨床に還元していく所存ですので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

フランス研修報告記

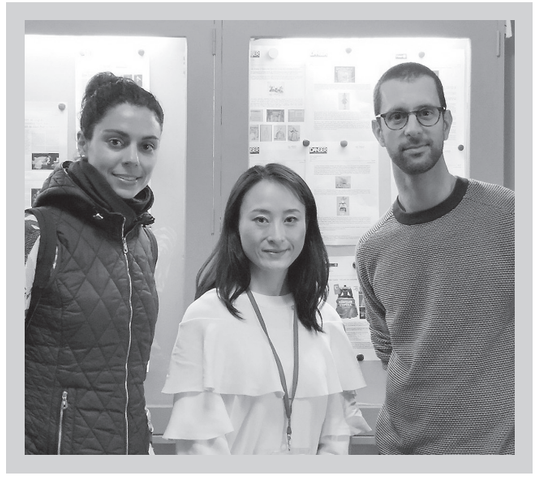
大阪医科大学三島南病院整形外科
木 澤 桃 子

私は平成31年度の日仏整形外科学会交換研修制度で5月から6月中旬にかけての約2ヶ月間、France Palais Garnier内にあるパリ・オペラ座バレエ団の診療所とHenri-Mondor病院で臨床研修をさせて頂きました。

私がパリに渡仏する前年の11月頃からジレジョーヌ(黄色いベスト運動)が激化していることを日本にいる頃から心配していました。特に、私の場合は2歳の息子と一緒に渡仏することを決意していたので研修先でうまくやっていけるかの心配に加え、子供との生活や幼稚園の状況などの不安や心配も重なり、沢山の方にお世話になり準備して臨みました。

France Palais Garnier-Opera National de Parisでの研修

世界トップクラスであり世界で最古の国立バレエ学校を有するパリオペラ座バレエ団に付属しているダンサー専門のスポーツクリニックで研修しました。同バレエ団の帯同ドクターをされているDr.Barreauが行なっている運動器傷害の診断や治療を見学しました。彼女とは2016年にスイスで開催された国際ダンス医科学研究会で初めて知り会ったのですが、当時は診療所も開設されたばかりで医療機材が何もない状態で診療をスタートしている状況であると聞いていたので、3年が経ち、診察スペースや超音波機械、アスレチックリハビリテーションを目的としたピラティス機材や筋トレスペースを見たときは彼女のバイタリティの強さと実行力に感銘を受けました。パリ・オペラ座バレエ団には約150人のバレエ団員が所属しています。団員は厳しい昇級試験に基づいた階級社会で役職が決まり主役を任命されるのは、そのうちのたった10名程のエトワールのみです。いつも素敵な笑顔で踊るダンサー達ですが、同じレッスンを受けている隣人は友人でありライバル。その陰には絶え間ない努力と怪我が付き物です。Dr.Barreauは1人のダンサーに充分すぎる程の時間をかけて診察していました。ダンサーは肉体的にはアスリートである反面、精神的には芸術家であり非常にセンシティブな内面を持ち合わせています。それ故に、単純に運動器疾患としての診断を下し治療するだけでなく彼らが控えているステージの内容や役柄を把握し、どのような特徴の動きが多く含まれており、それにより生じやすい傷害を把握し彼らが納得するまで説明するのも大切な仕事です。午前中の診察が終了すると、午後からのリハーサルやレッスン、ゲネプロの様子等をチェックし注意すべきダンサーの状況を把握します。また、ダンサーのヘルスケアをトータルサポートするためDr.Barreauを中心として理学療法士やトレーナーなどを含む12名の医療チームがあり、アスレチックリハビリテーションや栄養面、履物の指導等の予防医学を含め普段の整形外科診療のアプローチだけでは経験することができない特殊な健康管理が行われていました。また、Dr.Barreauも1歳児の母で働く母親としてお互いに共感できる事や気を遣い合える部分多かった事もあり、仕事と育児の向き合い方や働き方など診察以外でも話し合える点が多く楽しく充実した時間を過ごせました。


●左はBarreau医師、右は理学療法士のBrunet氏

Hôpital Henri-Mondorでの整形外科研修

パリ市内に位置する国立大学に付属するHenri-Mondor病院の整形外科教室で足の外科専門医であるDr. Piatに師事しました。フランス人にも多く見られる外反母趾の治療を中心とし外来診療及び手術、周術期管理を一環として見学させて頂きました。Dr. Piatはとてもフレンドリーな紳士で色々と気を遣ってくださいました。外反母趾矯正方法としては軽度から中等度変形症例にはChevron法、重度変形にはScarf法が行われていました。手術室入室から退室までの流れが非常にスムーズで麻酔の導入の際には前室で麻酔科医が局所静脈麻酔を組み合わせて行います。手術自体の手技も素早く正確で20分程度で1件が終了していました。また、術後に免荷はせず装具靴での全荷重を許可していました。即時荷重は日本人の私からすると生活面での負担が少なく良いと感じましたが、お洒落なパリジャンからするとネイルケアができないことや不恰好な装具は多少の不満があるようでした。患者側から見たフランス人の足の疾患や外科的治療に対する捉え方が日本とは少し異なり、文化的に医療への考え方の違いを知る事ができ視野が広がったように思います。

Dr.Barreau、Dr. Piatが迎え入れてくださり、紹介頂いた周囲のスタッフの方々も皆親切でフランス人の温かさを感じました。また、フランスでの生活は世界観が変わる程に新鮮でした。幼い子連れでのパリ生活でしたので心配事は絶えませんでしたが、個人主義のパリジャンでもベビーカーを押していると信号の色に関わらず車は一時停止し、地下鉄でも手伝ってくれる方がいて、国策面だけでなく少子化を克服したフランスの子供に対する意識は日本人とは大きな違いがあるように感じました。

最後になりましたが、フランスでお世話になったHernigou先生、このような素晴らしい機会を与えてくださった日仏整形外科の役員の先生方、快く送り出してくださった医局の先生方、この研修をアレンジして下さった藤原先生、本間先生に心から感謝申し上げます。今後も学会の一員として協力できるよう、そして今回の経験が今後の糧になるよう精進致します。

●手術室にてPiat先生と

日仏整形外科学会交換研修（2019）の帰朝報告

岐阜大学整形外科
岩井　智守男

留学のきっかけ

私のフランス留学は、京都大学の竹本充先生のご講演で、“ボルドーにOBEID先生という凄腕の脊椎外科医がいる”と拝聴したのがきっかけでした。

日本国内の凄腕の脊椎外科医の手術見学は数多く経験していますが、世界の凄腕脊椎外科医をみてみたいという気持ちが芽生えました。さらに、岐阜大学整形外科の秋山治彦教授の何気ない一言“来年は新人もたくさん入局しそうだから、先生、ちょっと海外留学でも行ってきたらどうですか？”に後押しされ、日仏整形外科学会交換研修に申請いたしました。最終的にはパリのネッカー小児病院と、ボルドー大学病院で、それぞれ3ヶ月ずつ研修いたしました。

Necker-Enfants Malades Hospital（ネッカー小児病院）

2019年4月2日から6月28日までの3ヶ月間、パリ15区にあるNecker小児病院で研修させていただく機会を得ました。私の最も興味のある分野は難治性の小児側弯症（麻痺性側弯や症候群性側弯）であり、年間250例の側弯症手術を行っているネッカー小児病院に日仏整形外科学会交換研修生（DirectorはProf. Philippe. Wicart）として留学するため、家族5人で渡仏いたしました。

ネッカー小児病院は600床のヨーロッパ最大の小児専門病院で、14手術室を有し、年間250件の脊椎手術を行っています（写真1）。フランスのみならず、イタリアなどの欧州全域、アルジェリアなどのアフリカ大陸の患者さんも訪れる、パリ大学の関連病院です。ほぼ全員が小児整形外科医であり、半分以上が女性です。小児脊椎疾患に携わる医師は、Christophe Glorion主任教授・Lotfi Miladi先生・Vicken Topouchian先生の3名で、私は主に、かの有名なJ.Dubousset先生の愛弟子に当たるMiladi先生（写真2）に師事し、大変よく面倒をみていただきました。

●写真1

●写真2

ちなみに、このパリ留学は私の初めての海外留学であり、留学初日はこれまでの人生で経験がないくらいに激しく緊張していました。

日本にも留学経験がある先述のP.Wicart教授は、初対面の私に、日本語で『おはようございます。』と挨拶してくださり、そのときの安堵感は今でも忘れられません。

研修内容

毎朝7時45分から全体カンファレンス（もちろん早口のフランス語です）に参加し、手術見学するのが日課でした。ここでは脊椎症例よりも上腕骨顆上骨折などの外傷症例や四肢骨切り症例の方が多く、フランス語の勉強と割り切って出席していました。隔週火曜日夕方に脊椎・脳神経外科合同カンファレンスもあり、参加させていただきました。同院では、キアリ奇形や脊髄腫瘍などの脊髄外科手術は、脳神経外科が担当していました。

ネッカーで手術がない日は、Paris Saint Joseph Hospital（Stephane先生）やEuropeen Georges-Pompidou Hospitalで成人脊椎手術を見学させていただきました。特にStephane先生には大変よく面倒をみていただき、フランス脊椎外科の治療戦略などを教えていただきました。

ネッカー小児病院での脊椎手術日は水・木・金曜日で、私が見学した手術はすべて側弯症手術でした。思春期側弯よりも、骨未成熟な乳幼児側弯や麻痺性側弯・症候群性側弯が多く、growth friendly surgeryが大半でした。特に、歩行不能で車椅子生活の患児に対する、座位バランス・呼吸機能・食欲の改善を目的としたT1-骨盤の長範囲固定を数多く見学しました。遠位アンカーには独自に開発した低侵襲の仙腸関節貫通スクリューを用い、近位アンカーにclaw hook settingを用いたself growing rod手術を多数行っており、機会があればscrub-inして参加できました。従来のgrowing rodと異なり、体幹の成長に伴って自然にロッドが伸長する画期的なシステムで、複数回の延長手術が不要な、すばらしいインプラントだと感じました。また、脊柱可撓性に乏しい100度以上の重度後側弯症に対する術中tractionのテクニックや、数ヶ月のHalo gravity tractionにより脊柱可撓性を向上させた後の後方矯正固定を見学する機会もあり、大変勉強になりました。

側弯症の固定範囲も含めた治療方針については、私がこれまでに獨協医大や岐阜大学脊椎班で培ってきたそれとは大きく異なりました。従来のgrowing rod法では、ある程度の骨成熟が得られた時点でgrowing rod “graduates” surgery（骨移植して骨癒合させ、growing rodを卒業する手術）を行います。彼はgrowing rodによるauto fusionに期待して“graduates” surgeryを行わず、8-10年の長期間で自然にauto fusionするのを待つ方針でした。ロッド折損やアンカートラブルなどが心配ですが、発想の転換が必要だと繰り返し強調していました。

骨未成熟な早期発症側弯症に対する欧州的な治療戦略は、私の側弯症治療の幅を広げてくれたと思います。

フランス語

フランス留学でもっとも心配な点が、『フランス語』であることは間違いありません。私は留学を考え始めた渡仏1年半前からラジオ講座を聞きはじめ、渡仏半年前から週に2回、自宅でフランス語の先生に教えていただきましたが、主に買い物・食事などの日常会話の勉強にとどまりました。これまでフランスに留学されました諸先輩方とは異なり、私にとってはフランス語だけでなく英語も、とてつもなく高い壁でした。無論、脊椎外科的な議論をフランス語で行うことは全く不可能で、病院内では専ら英語で対応していたのが正直なところです。

フランス料理

5月末までは病院内で日本人と出会うことは全くありませんでしたが、高知大学の北岡謙一先生が1週間ご滞在され、夕食をご一緒させていただきました。久しぶりに日本語で会話ができ、大変ありがたく思いました。

また、Miladi先生とStephane先生に誘われ、モンパルナスにある有名カフェ：La Rotondeにてフランス料理を堪能したのもよい思い出の一つです(写真3)。

●写真3

外来見学

毎週火曜日は、朝から夕方までMiladi先生の側弯症外来を見学する機会を得ました。『Bonjour!』から始まって、患者さんの体に良く触れ、同行した両親ともよくお話をし、最後には『Au revoir』と、かたい握手で終わります。診察や画像主体の私の外来とはまったく異質の外来で、大変参考になりました。また、パリでは、他院で撮影したレントゲンフィルムの紙コピーを持参するシステムが一般的で、患者さん家族が、画像や紹介状などを分厚い紙袋にいれて持ち歩いているのも印象的でした。

5月中旬には、岐阜大学の脊柱変形治療について発表する機会もいただきました。脊椎骨切りを併用した矯正固定術やすべての椎体に椎弓根スクリューを挿入するall Pedicle Screw constructは、骨未成熟な患者が多いネッカー病院ではあまり見る機会がないようで、幾つかのご質問をいただきました。このような貴重な機会を与えてくださいましたMiladi先生に、心より感謝しております。

家族との生活

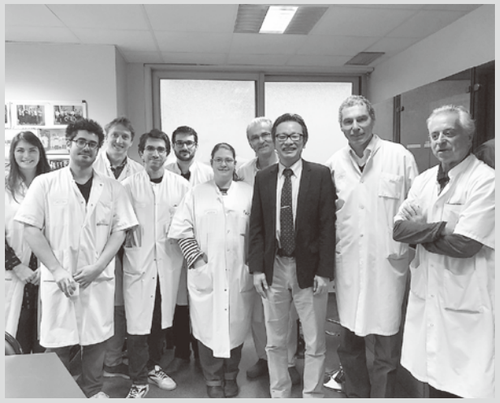
私どもは、パリ15区、エッフェル塔のそばに住居を構え、家族5人で3ヶ月暮らしました。はじめての海外生活は私の家族も同じことで、パリに到着した時には全員疲れはてて、空腹でした。慣れないフランス語を駆使して、パン屋さんでチョコパンとバゲットを買った時には、家族が私を尊敬の眼差しで見つめ、みんなで頬張って食べたパン・オ・ショコラは、フランスで食べたどのパンよりも美味しく感じました。

子供達はベルサイユにある日本人学校にバス通学し、修学旅行で南フランスに行きましたし、妻はコルドンブルーの料理教室にも通いました。週末は計画的に家族旅行し、ベルサイユ宮殿、ノートルダム大聖堂、パリマラソンの見学、パレ・ガルニエでのバレ鑑賞、美術館巡り(オランジュリー・オルセー・ルーブル・ピカソ)、モン・サン・ミッシェル(写真4)、ベルギー旅行、パリディズニーランド、ムーランルージュ、モンマルトル、パリ・サンジェルマンの試合観戦、錦織圭とナダルとのローランギャロスでの試合観戦、パリ航空ショーなど、この上ない時間を共有することができました。パリ留学を終えた今、苦楽を共にしたことで、家族の絆がより一層強くなったと感じています。

●写真4

CHU Bordeaux Pellegrin Hospital（ボルドー大学病院）

2019年11月4日から2020年1月30日までの3ヶ月間、フランス南西部にあるBordeaux university spinal surgery's unit 1(写真5)で研修させていただく機会を得ました。パリ留学を終えた頃、私の最も興味のある分野は、3-column osteotomyを要するような重度脊柱変形であり、



●写真5

●写真6

●写真7

年間2,000例の脊椎手術を行っているボルドー大学附属病院に日仏整形外科学会交換研修生（DirectorはProf. Olivier Gille）として留学するため、単身で渡仏いたしました。

ボルドー大学附属病院（Pellegrin）は南西ヨーロッパ最大の脊椎センター（写真6）で、年間2,000件の脊椎手術を行っています。フランスのみならず、欧州全域から患者さんが訪れます。脊椎疾患に携わる医師は、Olivier GILLE主任教授、Pr. Jean Marc VITAL名誉教授、Vincent POINTILLART教授、Ibrahim OBEID先生、Louis BOISSIERE先生などで、私は主に、成人脊柱変形で有名なOBEID先生に師事し（写真7）、大変よく面倒をみていただきました。

研修内容

月・水曜日の朝8時からフランス語の全体カンファレンスに参加し、手術見学するのが日課でした。年間2,000件の脊椎手術といっても、大半は頚椎前方固定や椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症に対する除圧や後側方固定といった一般的な手術でした。ただし、頚椎や腰椎の人工椎間板手術やその再手術も行われており、興味深く拝見いたしました。いずれの脊椎手術も猛烈なスピードで終わり、挿管したまま麻酔回復室へ移動させ、清掃後に次の患者がすぐに入室するシステムで、手術室2部屋で縦4件の脊椎手術が毎日行われています。

脊柱変形に関して言えば、ボルドー大学病院では骨未成熟な乳幼児側弯や麻痺性側弯・症候群性側弯は少なく、思春期特発性側弯症（以下AIS）や成人脊柱変形（以下ASD）症例、腰椎固定術後のフラットバックなどが大多数でした。全例にEOSを撮影し、全脊椎から下肢にかけてのアライメントを評価します。AISの後方矯正手術は2時間程度で、ASDに対するPedicle Subtraction Osteotomy併用のT10-骨盤矯正固定を3ー4時間程度で行っていました。ASDでは、ドミノを駆使してoblique take offを予防し、力学的な分散を図っていました。

また、毎週火曜日（ときに金曜日も）は、郊外にあるPrivate hospitalで、インド人フェローのSreenathやコンゴ人フェローのCharlesとともに、OBEID先生の手術助手をする機会を得ました。私も日本ではそれなりの数の側弯症手術を経験していると自負しておりますが、次元の違うOBEID先生の手術には終始圧倒されました。皮膚切開から骨性解離、スクリュー挿入、矯正操作、閉創に至るまで、すべての点に無駄がなく、信じがたい手術時間で終了していきました。ボルドーの治療戦略や手術手技を学べたことは、私の側弯症治療の幅をさらに広げてくれたと感じています。

臨床研究テーマ

3ヶ月の短期留学でしたが、OBEID先生からAPEX PROJECTと銘打った2つの臨床研究テーマを与えていただきました。海外での臨床研究ははじめての経験でしたが、四苦八苦しながら帰国直前の現在も、進行中です。多数の手術をこなしながら、research mindを忘れることなく、あらたな研究のアイデアを模索するその姿勢は見習う必要があると思いました。

その思考に加え、日本の勤務医生活と比較すれば自由な時間もありましたので、岐阜での症例報告も2本作成（未投稿）することができました。ご指導いただきました伏見先生、野澤先生、秋山教授には、この場をお借りいたしましてお礼申し上げます。

ボルドーでの生活

週末は計画的に旅行し、ボルドー市内観光、シャトー巡り（メドック、オーメドック、サンテミリオン）、バイヨンヌ（フランスバスク地方）、アルカション、ピラ砂丘、カルカッソンヌの城塞都市、ニース旅行（モナコ公国、カンヌなど、いわゆるコート・ダジュール地方）（写真8）など、この上ない至福の時を過ごすことができました。インド人フェローのSreenathと、有名なレストランで食事をしたことも素晴らしい思い出の一つです。ボルドーといえば、日本人脊椎外科医の人気の留学先ですが、私の滞在中にはいわゆる日本人留学生と出会うことは全くありませんでした。ただ、私の日仏整形外科学会交換研修の申請に際して、6枚もの推薦状をしたためていただきました宮本敬先生が1月に1週間、渡仏してくださり、OBEID先生の手術を堪能いただきました。久しぶりに日本語で会話ができ、ボルドーワインを片手にフランス料理に舌鼓を打ちながら、脊椎についてあつい議論を酌み交わし、大変貴重な時間をすごせましたこと、ここに改めて感謝申し上げます。宮本先生のご提案もあり、トゥールーズにあるClinique La Croix du SudのSebastien Charosky先生の手術を見学する機会を得ました。フランスで最も多くの脊柱変形手術を行っている先生の一人ですが、日程の関係で腰椎前方手術や人工椎間板手術をみせていただきました。宮本先生とともに過ごした1週間では、宮本先生がすべての費用（食事代、電車賃、トゥールーズのホテル代）を捻出してくださり、留学中の私を立ててくださる、その立ち振舞いに感激いたしました。将来、私が後輩の海外留学先を訪問する機会があれば、Gifu Spine Groupの伝統として、同じような振る舞いをしたいと思いました。

●写真8

謝辞

私とフランスとの架け橋になってくださいました日仏整形外科学会交換研修の関係者のみなさま、私を受け入れてくださいましたWicart先生・Miladi先生をはじめとしたネッカー小児病院のスタッフ、パリ留学について助言していただきました昭和大学の田邊智絵先生、Stephane先生、高知大学の北岡謙一先生、GILLE主任教授・VITAL名誉教授・OBEID先生をはじめとしたボルドー大学スタッフやフェローのSreenathやCharles、ボルドー留学について助言していただきました京都大学の竹本充先生、大阪医科大学の藤城高志先生、大阪市立大学の林和憲先生に、この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

また、留学を提案し、ご快諾してくださいました岐阜大学整形外科の秋山治彦教授、6枚に渡る推薦状（面接のときに、『これだけで合格に値する』と賞賛されました）を作成いただきました、2000年のフランス交換研修生である宮本敬先生、私が留守中の大学脊椎班を支えていただきました伏見一成先生・野澤聡先生・蔵満紀成先生、岐阜大学整形外科同門の皆様、妻と子供達に、この場をお借りいたしまして重ねて御礼申し上げます。

今後は、留学で得られた経験やフランス流の治療を大切にしながらも、自分流の側弯症治療の確立し、さらには日仏整形外科学会の発展に微力ながら貢献したいと存じます。

3ヶ月のフランス滞在で得たもの

滋賀医科大学
前田　勉

私はこの度、日仏整形外科学会の交換研修の制度を利用して9月から11月までの3ヶ月間フランスの病院で研修させていただきました。

研修先については暫く悩みましたが、3ヶ月間を2つに分けて前半はAmiens大学へ行くことにしました。当講座の七川歓次教授や福田眞輔教授（私はまだ学生）の時代はフランスとの交流を重要視されておりAmiens大学と交換留学の制度がありましたが、この20年間は往来が途絶えておりました。今後、SOFJOの一員として滋賀医大がフランスの交流を再開するにあたって、この古いコネクションを再開通しておくべきであると考え、Amiensを最初の研修先に選びました。

Amiens大学のTKAはPublicでNo.1（Le Point 2019発表）

AmiensはParisから電車で50分ほど北にあります。フランス最大級の大聖堂がありますが、現在は目立った産業はなく、Parisのベッドタウンとなっているようです。（どこかで聞いたことあるパターンです。さすがウチの元提携校。）現在の整形外科主任教授のMertl教授は23年前に滋賀に来られた影響からか日本人のように（？）hard workを続けられ、Le Pointが発表する2019年手術ランキングではフランスのPublic病院の中でTKAが1位（602件）、THAが5位（847件）にまでAmiens大学を押し上げてこられました。なぜ、こんなにたくさんの手術をこなすことができるのか？そのシステムはすばらしいものでした。

手術件数が多いのは、専門スタッフがプロ意識を持って働くから

Amiens大学整形外科・外傷外科の朝は毎日7:30から始まります。前日の手術症例のX線のチェックと夜間帯の救急外傷症例についてカンファレンスです。その後、若手は病院のカフェで仕事の打ち合わせと談笑（写真1）を済ませてから、それぞれの仕事に向かいます。手術室は8時過ぎには患者が入室してきます。整形外科は月曜から金曜日まで毎日6部屋を確保しておられ、そのうち3部屋が予定手術、3部屋は外傷などに割り振られます。Mertl教授（写真2）の手術日は週2日あり、1日1つの手術室を使って5件の手術をこなされます。ほとんどがTKAかTHAで、リビジョン症例を含んでいる日でも5件の手術が17時までに終わります。1つの手術室で1人の執刀医が、これだけの人工関節ができるというのは驚異的でした。その秘訣は多々あり、もちろんMertl教授の手術手技がシンプルで確実、手技のやり直しをする必要がほとんど無いことも重要な要素です。しかし、それだけではありません。執刀医をサポートするシステムも優れています。患者は（廊下をパーテーションでしきっただけの）前室で麻酔をかけた状態で手術室に入るので入室後速やかに手術が始まること、術後X線はリカバリールームで撮影すること、すばやい手術室清掃など、我々には真似できないほど効率を追求したシステムです。洗練されたオペナースがいることはもちろん、麻酔科ナース、清掃スタッフ、体位取り専門スタッフと、それぞれにプロがいます。もし、ちょっとでも流れがスムースでないと医師はイライラして、私に聞いてきます。「日本はもっと早いんでしょ？」どうやら日本の手術室はトヨタの製造ラインのようなシステムだと思ってくれているようです。その度に、自分の現状をさらけ出さなければならないのには、いささか恥ずかしかったですが、嘘はつけません。うちは入室してから手術開始までに2時間近くかかることもあるし、おそらく日本では患者をこのように回すことが倫理上できないと思うと言い訳をすると、「じゃあ、僕たちはハッピーだね。」と言われてしまいます。このような高回転の手術室の中に入って、私はすごく忙しい日々を過ごしました。このようにAmiensでは訪れた初日からMertl教授のはからいで、ほとんど毎日1日5件の手術に参加していました。わずか6週間で100件近い手術に参加したことになります。

●写真1

●写真2

AmiensのTKAの特徴

AmiensのTKAの基本手技は当大学で行っている方法と似ていました。脛骨内側の剥離をほとんど行わないのも最近の日本のトレンドと同様だと思いますが、Mertl教授は7年前からこの展開方法を行っているとおっしゃることには驚きました。剥離なしでも骨の露出は常に良好です。そして、外反やリビジョン症例などで展開が予想される症例では迷わずに脛骨粗面の骨切りを用いることで、いとも簡単に手術をこなしてしまいます。そして粗面骨切りをしてもすぐに可動域訓練を開始するというアグレッシブな姿勢には感服させられました。また、感染TKAに対する一期的再置換術も常識を覆されるばかりです。なぜこれほどまでに積極的な手術と後療法ができるのか？と考えさせられる日々でした。もしかしてPublicを訪れるフランスの患者は再手術になっても文句を言わないのか？などと考えてもいましたが、Mertl教授の長年の経験や患者からの信頼関係があるからできる技なのかもしれません。すばらしい手術をたくさん見せていただきました。プロフェッショナルな仕事に感銘を受けることばかりでしたが、直ちに全てを真似ることはできないとも感じました。

LyonのCroix-RousseでのRobotic UKA見学

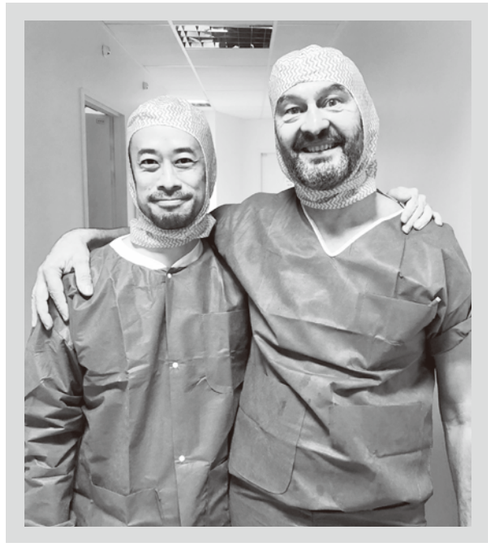
次の研修先にはLyonのHôpital de la Croix-Rousseを選びました。ここでは新進気鋭のSébastian Lustig教授（写真3）がロボットを使ったUKAを行なっておられます。ここも多くのTKA/UKAを行なっており、先ほどのLe Pointの膝人工関節ランキングでは5位（708件）を獲得しています。私はRobotic UKAを導入したいというよりも、どちらかというと「人工関節にロボットなんて、本当に必要なのか？」とむしろ懐疑的なスタンスで研修に臨みました。私の想像ではナビゲーション手術の

延長のような手術をイメージしていましたが、実際はその上を行くものでした。UKAの術中は人工関節のサイズ、骨の切除量や角度を決定しなければなりませんが、ロボットはこれらの決定をするのに、骨の大きさや最終アライメントはもちろんのこと、靭帯バランスも考慮してくれるのです。当大学が持っているシステムを駆使して術前3Dテンプレートや術中ナビゲーションを用いても、靭帯バランスの影響を考慮することは出来ません。ロボットはたった一つでそれがすべて可能なのです。結果、すべての可動域で最善のギャップが整うようです。これは人間なら相当熟練しなければできないことで、またその技術を他者に伝授するのは難しいと思われますが、ロボットなら誰でも可能なのです。オーストラリアから来ていたフェローが言うには、現在オーストラリアではナビゲーション手術の件数は頭打ちになって、ロボット手術の件数が増加しているとのことでした。Robotic UKAは私の想像よりもはるかに優れたシステムであり、世界的にはロボット人工関節が増えていくように感じます。当大学への導入は価格が大きな問題になりそうですが・・・

●写真3

Lyonでのカスタムメイド TKA見学

Lyon滞在中に1日だけですが、Centre Orthopédique SantyのMichel Bonnin教授（写真4）の手術にも参加させていただきました。ここではsymbios社製のカスタムメイドTKAについて勉強させていただきました。私は究極的にはACL/PCL温存型のTKAが理想と思っておりますが、その考えはBonnin教授も同じで、その手始めとしてカスタムメイド人工関節に携わっておられることをAFJOの中で知りました。そこで手術見学を申し込みさせていただきましたら、快諾いただきました。患者が本来持っていたjoint lineをカスタムメイドTKAで再現するというコンセプトで、（厳密には少し異なりますが）Kinematic alignmentとして近年注目されている手技です。術前CTから作られた骨モデルに適合するように患者ごとに特注されたTKAコンポーネントを、これまた特注骨切りガイドを使って設置します。手術室に届くインプラントは、大腿骨と脛骨コンポーネントが各1個、ポリエチレンインサートが+0mmと+2mmの2種類、あとは膝蓋骨コンポーネントのみと驚くほど少ないです。手術も非常にシンプルで、膝を展開して、ガイドに合わせて骨を切って、インプラントを設置するだけです。患者固有の関節面が再現されているので靭帯バランスを調整する必要はありません。皮膚の閉創はナースがしてくれるので、どんどん手術が回ります。2部屋同時進行で1日に8件の手術をこなされます。その忙しい時間の中でBonnin教授とどのようにjoint lineを再現するのかについてディスカッションすることができた興奮はいまだにさめません。



●写真4

この3ヶ月での私の変化

この3ヶ月間でフランス語が少しだけわかるようになりました。

この3ヶ月間で髭を生やしました。

この3ヶ月間でクロワッサンにうるさくなりました。

他には、これまでのTKA手技を少し見直しています。Mertl教授からはターニケットを使わないこと、Lustig教授からはsubvastus approachを取り入れています。結果的に無理なく早期の退院が可能となり、患者さんにとってのTKAのハードルを下げることができるようになるのではと期待しています。

また、終盤の3週間のみですが、家族をフランスに呼び寄せて共に過ごせたことが緊張状態にあった私にとって癒やしとなったのはもちろんのこと、子供たちにも大きな経験となったようです。3週間も海外生活をするのは子供たちにとって初めての経験で、単なる旅行とは違ったようです。フランスの良い点と逆に日本の良い点についても感じとってくれたと思いますし、外国語を学ぶ意味についても少し理解してくれたように思います(写真5)。

フランスでの経験は私と私の家族に、間違いなく大きな影響を及ぼしたと思います。まだ、その経験すべてを消化しきれていませんが、その余韻に浸りながらフランスの勉強を続け、フランスの良いところは出来る限り吸収したいと思っております。

最後になりましたが、フランス研修をご許可いただいた今井教授をはじめ、私の不在中にご迷惑をおかけした同門の先生方に厚く御礼を申し上げます。そして、このような素晴らしい交換研修のシステムを作ってこられた日仏整形外科学会の役員の先生方に敬意を表し、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

●写真5　シャモニーで家族と

『ガジェリー肩関節外科学』の紹介

医療法人南島整形外科　院長・理事長　南　島　広　治

はじめに

この度著者D.F.GAZIELLYの「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」の日本語翻訳版を医歯薬出版から刊行しましたので、著者の紹介、仏語翻訳出版の難しさ、本の解説そして仏語翻訳雑感について書かせて頂きます。

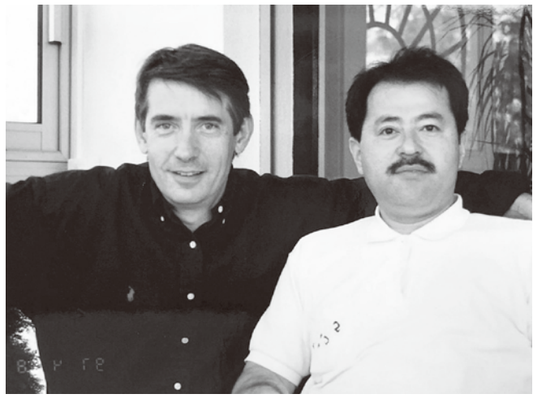
原題は「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」で直訳すれば『肩のリハビリと手術』ですが、内容を考慮して広く『肩関節外科学』としました。

ガジェリー先生

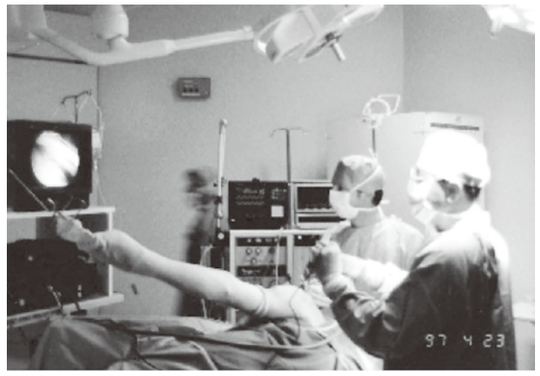
著者D.F.GAZIELLYはリヨン大学整形外科Albert Trillat教授の門下です。私とGazielly先生との出会いは、1996年私がパリで2年間の研修終了後小林晶先生より御紹介して頂いたのが縁で、サンテチェンヌの彼の職場を訪れ、約1ヶ月間彼の指導の元で肩の外科を研修しました。彼はヨーロッパで最初にプライベートの肩関節外科センターをサンテチェンヌに創設した人物です。

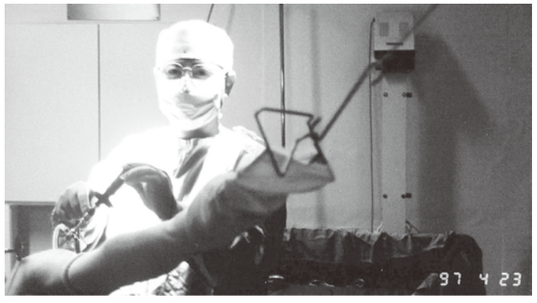
この街は人工股関節Dual Mobilitéの考案者であるCHU de Saint Étienne整形災害外科教授故Gilles Bousquet ブスケ教授の勤務地でしたが、私が滞在した時は1997年4月でブスケ教授は前年4月に亡くなられており、残念ながらお会いする事はできませんでした。Gazielly先生はブスケ教授の下で股関節外科に従事された時期もあったそうです。

彼の印象はとてもfriendlyでトロントやニューヨークで肩関節外科のフェローの経験があるだけあって英語も堪能で、2人の男性看護師を助手に付けて手術を手際よくこなしていました。当時はまだスライドの時代で自宅には沢山のスライドを宝石箱のような箱に入れて整理されていました。自宅の訪問日誌には当時東海大学整形外科教授故福田宏明先生のサインが書かれていました。「HiroakiをフランスHiひと言えずイオアキ、私の名前Hiroharuもイオアウ」と読まれ、フランス語の発音の難しさを知りました。フランス人にしては珍しくゴルフが大好きでゴルフと庭仕事がストレス発散で、日本食の中では寿司が大好物とのことでした。



●1997年4月、サンテチェンヌ自宅にてガジェリー先生とツーショット、2年間une salle de gardeで昼食をいただきふくよか





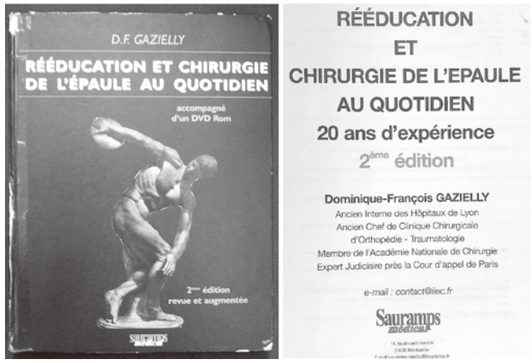
●1997年4月、サンテチェンヌの病院、肩関節鏡手術

彼は学究肌で学会報告も多く、私の帰国直後、京都で開催の日仏整形外科学会で彼は「腱板補強術RCR (Rotator Cuff Reinforcement)」をテーマに招待講演を行いました。断裂部をポリエチレン製の腱板の補強材で修復する手術で、術後6か月で血管が増生し結合組織で置換されたことを証明する学会用のポスターを見せてもらい、目から鱗が落ちる思いだったことは記憶に新しいです。

その後1999年より2009年までパリのClinique Jouvenetの肩関節外科センター長、ジュネーブ大学整形外科の顧問医としてご活躍後、2011年よりスイスのGenolier Cliniqueに勤務されています。このクリニックには世界中のセレブが訪れており、診察室からはレマン湖、モンブランが展望できます。

2017年の5月の連休にミラノの学会後にGenolier Cliniqueを訪問した際に、彼の名著「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」を謹呈されました。

このことが翻訳出版のきっかけです。、帰国後自宅でゆっくり目を通しますと非常に分かりやすく、日本の肩関節外科の教科書にはない、初学者にも専門医にも勧められる隠れた名著と思いました。それからすぐ



●原著:仏語「Rééducation et chirurgie de l'épaule au quotidien」Dr.Dominique Gazielly, Sauramps, 2006.

●1997年京都にて日仏整形外科学会後ディナー、ガジェリー先生、小林晶先生、小野村敏信先生らと京都のフランス料理店「萬養軒」で懇親会

●2017年5月、スイス、ジュノリエクリニック、ガジェリ先生の書斎

に著者に翻訳の許可を頂き、初めての翻訳作業が始まりました。皆様からよく翻訳の仕事は辛くなかったかと質問を受けますが、教科書の内容が論理的で分かりやすく、フランス語の勉強と同時に肩関節外科の知識を深めることができ、また個人レッスンやアンステイチュ・フランセ九州で学んだ成果の集大成のつもりで取り組みました。

仏語翻訳出版の難しさ

フランス語翻訳出版の難しさについてですが、、福岡大学教授の塩田先生の「カパンジー機能解剖学」の場合を例にとりますと、お二人は既知の間柄で著者カパンジー先生から塩田先生に翻訳の依頼があり、フランスの出版社Maloineと医歯薬出版社、医歯薬出版と塩田先生の間で契約が交わされ翻訳の仕事に取りかかられたのに対し、私どもの場合フランスの出版社を通さず私たちの力で日本の出版社を探さなくてはなりませんでした。また、日本版で出版するかあるいは日本のどこの出版社に依頼するかの最終的決定権は著者にあるわけですから、著者とはできるだけ密に連絡を取る必要がありました。

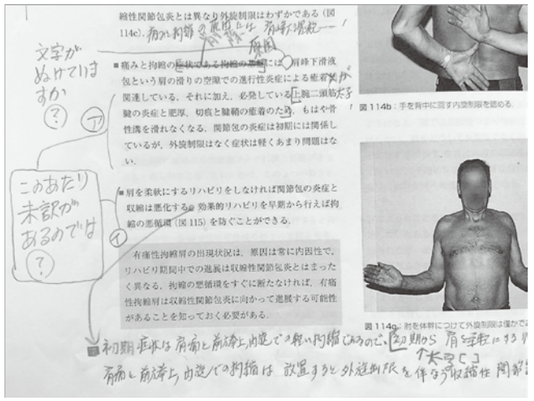
著者からは「日本の出版事情は全くわからないので君に任せる」と言われましたので、私の方で探すようにしました。まず知人から紹介していただいた出版社Mに連絡しますと好意的で、担当者がわざわざ当院を訪問して下さりましたが、著者に相談したところ「Non」の返事でした。1冊本を数十回に分けて月刊医学雑誌に掲載して最終的に1冊で出版する計画でしたが、「自ら書いたデッサンには著作権があるから」ときっぱりと拒否。自分が手間暇かけて熱心に描いたデッサンや貴重な写真を無料では掲載させない。また出版の資金面の協力を製薬会社に依頼するように頼まれていました。私は翻訳本を出版して頂けるなら一流の出版社でなくてもよいから承諾しようと考えていましたが、著者の考えは「月刊雑誌にデッサンや写真を無料で掲載することは考えられない。時間と労力をかけて完成した翻訳を安売りはするな！むしろ出版社は我々二人に前提条件として謝礼を支払うべきである。」と大変強気でした。出版社側は著作権に対して金銭を支払うことは考えていないとのことで、「著作権について我が国とフランスの違い」が明らかになり、「訳者は著者の意見を尊重し優先すべき」と考え断念しました。

出版社1社当たり採用の有無の結果が出るまで2-4ヶ月かかりますから長期戦でした。小林先生は出版社が決まらず私が焦っていると思われたのか「呉々も出版に高額のお金を支払うことはしないように」とアドバイスを受けました。恐らく「自費出版はするな」ということだったと思います。著者も同様の意見だったと思います。

その後紆余曲折しましたが、平成30年12月22日慌ただしい年の瀬に医歯薬出版に電話したところ快いお返事を頂き、即座に翻訳文、解説、紹介、イラストやX線写真DVDを送りましたら、最初からすべて必要な書類が揃っていて出版社側は好印象で、年明けの1月7日の第1会議でパスしました。第2会議では「古い本2006年であっても菅谷先生らの2018年出版『肩関節手術のすべて』と比較してこういう良さがあるから翻訳本を出す意義がある」ことを示すようにと1週間の期限で宿題を渡されましたので、次のような回答を提出しました。「リバース型人工肩関節置換は1985年にフランスのGrammont先生の考案によるもので、本書は2006年出版とはいえリバース型人工関節を使用後20年が経過しており、しかものGrammont先生とリヨン大学の同門であるGazielly先生のリバース型人工肩関節に関する臨床成績とレントゲンの結果は説得力がある。またリハビリの注意点や禁忌事項が詳細に書かれており、我が国では見ない特徴です。一方でリバース型人工肩関節の我が国への導入はまだ4年と浅いので長期成績は不明な点も多い。アングロサクソンと異なるフランス人の哲学に基づいたフランス肩関節外科の伝統である独創性と斬新さが読み取れます」この回答で出版社からGoサインを頂きました。

翻訳完成後は小林先生から丁寧に監訳をして頂き、小林先生の監訳の辞、著者からの日本人向けの新たな序文と滋賀医科大学今井晋二教授から素晴らしい推薦の辞を戴き、本の信用度を一段と高めることができました。5月初旬に初校組デザインが決まり、初校正ゲラではフランス語の堪能な人のチェックにより未訳の部分も見落とすことなく、謙虚に「この部分は未訳なのでは？」と指摘され流石です。出版社の校正の方には頭が上がりません。校正で未訳部分はきちんと書き加えました。7月中旬に再校正、9月中旬に目次、注釈、文字統一、9月19日に本の表紙のデザインは6つのサンプルから私どもで選ばせていただき、書名や副題、定価も希望通りでした。

本の定価決定のお知らせを聞いた瞬間は大変感激しました。長い時間をかけた努力が報われ出版が現実のものになり、それまでの長い苦労のトンネルからやっと脱出できた独特の安堵感を味わいました。国内の主な出版社三社からの最近20年の仏語から和訳の翻訳出版状況を調査しました結果、医歯薬出版からKapandji先生の「カパンジー機能解剖学Ⅰ～Ⅲ」・「カパンジー生体力学の世界」、Dubrana先生の「整形外科手術進入路マニュアル」いずれも訳者は塩田悦仁先生そして我々「ガジェリー肩関節外科学」、医学書院から「触診解剖アトラス」第2版2007年訳者セラピストの1点で南江堂は0点でした。医学界では英語からの翻訳は多いが、仏語からの翻訳は極めて少なく、外科学の教科書は初めてのようです。



●初校正ゲラ、未訳の部分も見逃すことなく謙虚に御指摘された

翻訳 ＼ 出版社	医歯薬出版	南江堂	医学書院
仏語 ⇒ 日本語	カパンジー 『カパンジー機能解剖学Ⅰ～Ⅲ』 『次世代へのメッセージ カパンジー生体力学の世界』 塩田悦仁 Dubrana 『整形外科手術進入路マニュアル』 塩田悦仁 ガジェリー 『ガジェリー肩関節外科学』 南島広治	0点	2000年以降 1点のみ
英語 ⇒ 日本語	年間10点	外科 1点 内科 0点 学生 1～2点 （年間の翻訳数）	58点 （直近5年）

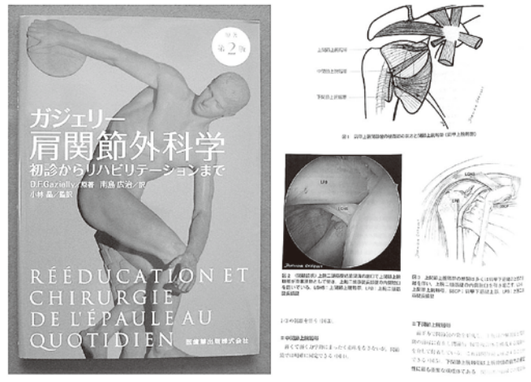
●最近20年間の三社での翻訳出版状況

本の解説

本書は肩関節外科の教科書であり、初診から画像、臨床診断、鑑別診断そして手術、リハビリテーションまで体系化され、特に肩の外傷とリハビリテーション、腱板断裂、人工肩関節置換術の章に重点をおいています。

フランス人らしく大変独創的で、本を開けば臨床の現場の雰囲気が伝わります。また、著者が1人のため編集ものの著作に比べ、各章でフィロソフィーに区別はなく、全章を通じてX線像や関節鏡写真、イラスト、記述に統一感があり、勉強する際に読者の記憶に残りやすいかと思われます。また難しい言語は注釈を付けるなどの工夫をしてわかり易くしました。

著者のサイン入りのイラストは自らの力作で、原著にも使われた著者のお気に入りの表紙の「円盤投げ」は紀元前のギリシャの彫刻家ミュロンの傑作で、著者はこれをロゴマークと同様に使用しているそうです。



●ドミニク・ガジエリ著，南島広治訳，「肩関節外科学」:228頁，A4判，医歯薬出版，2019年10月

表紙やイラストにもこだわりを持ちフランス人の芸術性の高さを感じ取ることができます。

滋賀医科大学整形外科今井晋二教授は本書の推薦の辞で「オリジナリティーの豊かなフランス人の考え方を学ぶ事は日本人が普段の診療の中で固定化した考えの中から一瞬の新しいひらめきを得る糧になるだろう」と述べておられます。船橋整形外科病院の老沼先生も第14回AFJOで「固定観念からの脱却」をテーマにされていました。特にアングロサクソン医学に影響をうけた我々はフランス医学の独創的な発想にはしばしば驚かされます。本書を手に取りフランス人の哲学に基づいたフランス整形外科の伝統的な独創性と斬新さを読み取ることで、きっと新たな研究のテーマが思い浮かび、読者の期待に応えてくれると信じています。

仏語翻訳雑感

翻訳とは他人のふんどしで相撲をとるようなものであると批判する人もありますが、幸徳秋水はご自身の翻訳「20世紀の怪物帝国主義」の苦労の経験から、「翻訳は著述より遥かに困難で少なくとも著述に劣るところはない」と賞賛され勇気を貰いました。翻訳の大家である堀口大学は「翻訳こぼれ話」の中で次のように述べています。「詩をわがものに、原作に仏語の着物を脱がせ、一度裸にした上でこれに僕の言葉の書物を着せる以外の手はないと気づいた。つまり僕の訳詩は恋焦がれる美人のやわ肌に触れると同じ気持ちでなし続けられたというわけだ」大家らしく何ともニュアンスのあるお言葉ですが、私の場合は医学書ですから、文学作品とは違いやわ肌に触れると同じ気持ちにはなりませんでしたが、本に対する愛着は著者に劣らず、何度も読み直し私なりの分かりやすい言葉の着物を着せています。

おわりに

もしもスペシャリストとしての道を歩み続けていたら、この度の肩関節外科学の翻訳に着手していただろうか？私にとって仏語は英語、独語に次ぐ3つ目の外国語で、しかも得意分野とはいえない肩関節外科学を翻訳出版できた事は全く予期せぬ運命的なご褒美のような気がしてなりません。語学も継続したらどなたでも身近にチャンスがあるということではないかと思います。

失望の時もフランスで知り合った友人や恩師から元気を貰い人生のビタミンになっており、仏語は人生を豊かにする武器になり得ると思います。

小林晶先生をはじめ国内外の多くの素晴らしい先生方に出会い、医学のみならず文学、音楽、絵画などフランス文化に触れる機会が増え、大いに楽しませていただいています。私は故なだいなださんのご意見に賛成で、フランスには仏語の分かる日本人にしか見つけられない宝があり、発見した喜びは仏語を学んだ者しか分からないということです。

この度の「ガジェリー肩関節外科学」が先生方のお役に立ってくれることを願ってやみません。何度も何度もお会いして監訳をしていただきました小林晶先生には心から感謝申し上げます。

今後も仏語の勉強の醍醐味の一つである宝探しの旅を続けて新しいもの、予想外のものを発見し、会員の皆様にご報告出来れば幸いと考えています。

日本側・フランス側役員を紹介します

日本側役員

会　長	金子　和夫	名誉会員	小野村敏信
副会長	大橋　弘嗣		小林　　晶
書記長	藤原　憲太		坂巻　豊教
会　計	青木　　清	顧　問	瀬本　喜啓
書　記	前田　　勉	交換研修委員	水野　直子
幹　事	安永　裕司		西脇　　徹
	久保　俊一		金城　　健
	本間　康弘	交換研修外部委員	竹本　　充
	今井　晋二		大槻　周平
	飯田　　哲		藤城　高志
	田中　康仁		内藤　聖人
	星　　忠行		市原　理司

フランス側役員

President	Philippe Hernigou (Paris)
Secretaire General	Philippe Merloz (Grenoble)
Tresorier	Philippe Wicart (Paris)
Membre de Bureau	Philippe Liverneaux (Strasbourg)
	Alain Durandeau (Bordeaux)
	Jean Pierre Courpied (Paris)
	Jacques Caton (Lyon)
	Olivier Guyen (Lyon)

■ 日仏整形外科学合同会議（AFJO）開催一覧

会　期	開　催　地	議　長
第１回　1990年 11月12日	パ　リ	Régie C. Michel
第２回　1992年 10月４日	京　都	七川　歓次
第３回　1994年 11月７日	パ　リ	Charles Picault
第４回　1996年 ４月13～14日	東　京	菅野　卓郎
第５回　1998年 ９月17～19日	リヨン	Jean Pierre Courpied
第６回　2001年 ５月11～12日	大　阪	小林　　晶
第７回　2003年 ９月26～27日	グルノーブル	Philippe Merloz
第８回　2005年 ５月６～７日	京　都	瀬本　喜啓
第９回　2007年 ９月14～15日	ニース	Jacques Caton
第10回　2009年 ５月28～30日	沖　縄	大橋　弘嗣
第11回　2011年 ６月２～４日	ボルドー	Arain Durandeau
第12回　2013年 ５月30～６月１日	京　都	飯田　寛和、田中　千晶
第13回　2015年 ６月４～６日	サン・マロ	Philippe Hernigou
第14回　2017年 ５月12～13日	日　光	高橋　和久、老沼　和弘
第15回　2019年 ９月14～15日	リヨン	Luc Kerboull
第16回　2021年 ４月５～７日	奈　良	田中　康仁

■ 日仏整形外科学会（SOFJO）開催一覧

会　期	開　催　地	会　長
第１回　1987年 11月６日	神　戸	七川　歓次
第２回　1988年 10月29日	東　京	七川　歓次
第３回　1989年 11月11日	大　阪	七川　歓次
第４回　1991年 11月９日	大　阪	七川　歓次
第５回　1993年 10月30日	大　阪	七川　歓次
第６回　1995年 ５月10日	大　阪	七川　歓次
第７回　1997年 11月１日	大　阪	七川　歓次
第８回　1999年 10月16日	大　阪	山野　慶樹
第９回　2000年 11月25日	横　浜	坂巻　豊教
第10回　2002年 10月12日	弘　前	原田　征行
第11回　2004年 11月６日	神　戸	小野村敏信
第12回　2006年 10月14日	京　都	久保　俊一
第13回　2008年 ９月27日	東　京	金子　和夫
第14回　2010年 ９月25日	広　島	安永　裕司
第15回　2012年 ９月22日	東　京	飯田　　哲
第16回　2014年 ９月６日	福　岡	塩田　悦仁
第17回　2016年 11月25～26日	岡　山・直　島	藤原　憲太、青木　　清
第18回　2018年 ７月７日	大　津	今井　晋二
第19回　2020年 ６月20～21日	札　幌	星　　忠行

あなたも フランス研修に！

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりですのでお申し込みください。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募をご遠慮ください。

募　集　要　項

1）募集人員

若干名（2021年度）

2）研修条件

1．滞在期間は3か月間を原則とする。
　この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。
　1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。
　7月、8月はフランスのバカンスシーズンになるので避ける方が望ましい。
2．フランスでの滞在施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。
3．費用について
　a）渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。
　b）フランス滞在中の滞在費、食費および移動などの費用は原則として自己負担とする。
4．帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。
5．本年度の研修開始時期は4月以降とする。

3）応募条件

1．応募者は日仏整形外科学会会員であること。　2．応募者は日本整形外科学会専門医であること。
3．原則として40才を応募年令の上限とする。　4．勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。
5．フランス語または英語を話すもの。

4）応募に必要な書類

1．日仏整形外科学会交換研修申請書（TXT, PDFをダウンロード・毎年様式が変わるので、注意する事）
2．履歴書（大学卒業以降とする）　3．応募の動機や抱負についての小論文
4．日仏整形外科学会会員1名の推薦状──推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。
5．業績目録──主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要）
6．渡仏承諾書　a）大学の医局勤務者……教授の承諾書
　　b）病院または施設勤務者……勤務している病院または施設の責任者の承諾書
　　（大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。）
以上1．以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピーを23部を同封すること。

5）選考方法

1．第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は2020年8月上旬に個別に連絡する。
2．書類選考に合格したものには2020年9月に滋賀医科大学整形外科学講座において面接を行う予定である。面接の時間は個別に通知する。
3．合否は2020年9月下旬に通知する。
4．合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。

6）申請締め切り

2020年7月31日必着

7）申し込み先

日仏整形外科学会事務局　　滋賀医科大学整形外科学講座内
〒520-2192　滋賀県大津市瀬田月輪町　滋賀医科大学整形外科学講座
Tel（077）548-2252　Fax（077）548-2254
日仏整形外科学会　　係　前田　勉

フランス人研修医

受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFCOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ケ月間ですが、1ケ月でも2ケ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申しあげます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFCOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会 会長　金子　和夫
日仏整形外科学会 交換研修係　金子　和夫
連絡先：滋賀医科大学整形外科学講座

〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町
TEL 077-548-2252（お問い合わせは前田　勉まで）
sofjo.shiga@gmail.com

第19回日仏整形外科学会　開催のご案内

（19ème Réunion de la Société Franco-Japonaise d'Orthopédie）

第19回SOFJOを2020年6月20日（土）・21日（日）に札幌で開催予定となっております。
COVID-19騒動があり、日程や場所については変更の可能性もあります。
お手数をおかけしますが、逐次学会ホームページにてご確認頂ますようお願い申し上げます。

（SOFJO事務局　前田　勉）

第16回日仏整形外科合同会議　開催のご案内

（16ème R'union de l'Association France-Japon d'Orthopédie, AFJO）

第16回AFJOを2021年4月5日（月）～7日（水）に奈良で開催予定となっております。

【開催地】奈良春日野国際フォーラム 甍～I・RA・KA～

【会　長】田中康仁（奈良県立医科大学　整形外科）

1

仏日・日仏整形外科学用語集

仏日整形外科用語集は森崎直木先生が編集を行われ、1989年に第1版が文光堂から出版されました。その後、1991年に改訂版が出版されましたが、森崎直木先生が亡くなられて以降、改訂されることなく現在に至りました。フランスの整形外科を知るためにはどうしてもフランス語の論文を読む必要がありますので、森崎先生の仏日整形外科用語集は非常に有用な辞書でした。しかし、医学の進歩に用語集も追いついて行く必要があると考え、日仏整形外科学会が中心となってその後の時代に応じて出現した新語を大幅に追加して新しい用語集の編集を行なってまいりました。最終的には単語数は仏日がおよそ7000語、日仏はおよそ6200語となりました。編集にあたりましては、日本整形外科学会学術用語委員会から綿密な指導をいただき、また最後には診断と治療社編集部のみなさんの度重なる校正を受けて2013年5月に出版の暁となりました。

購入希望がありましたら事務局までご連絡下さい。診断と治療社のホームページからでも購入していただけます。また、会員の方は学会ホームページからダウンロードもできます。是非ご活用下さい。

2

Société Franco-Japonaise d'Orthopédie

Welcome to So.F.J.O Homepage

ようこそ日仏整形外科学会（SOFJO）のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

http://www.sofjo.gr.jp/

です。

是非のぞいてみてください。

- 新着／NEWS
- 沿革
- 活動内容
  - 入会のご案内
- 役員紹介
- 共同研究
- 交換研修
  - 交換研修帰朝報告
- 会誌INFOS
- 仏日・日仏整形外科用語集
- 日仏整形外科協議会（AFJO）
- AFJO（English）
- 関連リンク集

3

平成30年度会計報告

歳入の部	（単位：円）
会員年会費	1,366,000
企業寄附	500,000
第18回日仏整形外科学会より寄附金	400,000
第14回日仏整形外科合同会議より寄附	500,000
広告料	280,000
預金利息	13
前年度繰越金	2,913,623
計	5,669,636

歳出の部	（単位：円）
日本人交換整形外科医奨学金（7名） 渡航費＋滞在費（一部）	700,000
フランス人交換整形外科医奨学金 0名	0
SOFJO/AFJO開催関係費	0
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	0
日仏共同研究、研究助成金	0
インターネットホームページ維持管理費	33,079
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	66,432
事務費	8,304
アルバイト代	216,000
会議費	29,832
旅費・交通費	349,755
印刷費	690,120
雑費	3,240
出金小計	2,096,762
次年度繰越金	3,572,874
計	5,669,636

令和元年度事業費予算編成

歳入の部	（単位：円）
一般会員年会費	1,528,000
用語集販売	3,600
企業寄附	500,000
会員寄附	0
広告料	500,000
預金利息	3
前年度繰越金	3,572,874
計	6,104,477

歳出の部	（単位：円）
日本人交換整形外科医奨学金 渡航費＋滞在費（一部）100,000×４名	400,000
フランス人交換整形外科医奨学金 滞在費（2ヶ月）＋交通費　100,000×2名	200,000
SOFJO/AFJO開催関係費	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	20,000
日仏共同研究、研究助成	200,000
インターネットホームページ維持管理費	350,000
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	120,000
事務費	30,000
アルバイト代	300,000
会議費	35,000
旅費・交通費	360,000
印刷費	650,000
予備費	30,000
出金小計	3,695,000
次年度繰越金	2,409,477
計	6,104,477

4

これまでに交換研修に参加された先生方

年度	氏名	所属
1990	稲毛　昭彦	大阪医科大学
1991	三輪　隆	帝京大学
1991	末松　典明	旭川医科大学
1992	星　忠行	弘前大学
1992	村上　元庸	滋賀医科大学
1992	久保　俊一	京都府立医科大学
1993	小浦　宏	岡山大学
1994	西川　真史	弘前大学
1994	岩崎　幹季	大阪大学
1995	石澤　命仁	滋賀医科大学
1995	安永　裕司	広島大学
1996	安間　基雄	順天堂大学
1996	寺門　淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田　和明	岐阜大学
1997	金子　和生	山口大学
1998	山川　徹	三重大学
1998	岡本　雅雄	大阪医科大学
1999	清重　佳郎	山形医科大学
1999	川崎　拓	滋賀医科大学
2000	宮本　敬	岐阜大学
2000	藤井　一晃	弘前大学
2000	細野　昇	大阪大学
2001	鳥飼　英久	千葉大学
2001	久我　尚之	九州大学
2002	瀧川　直秀	大阪医科大学
2002	松峯　昭彦	三重大学
2003	柁原　俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹　有里	慶応義塾大学
2004	和田　孝彦	関西医科大学
2004	久留　隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田　幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾　篤	九州大学
2006	小室　元	阪和住吉総合病院
2006	城戸　顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田　宗彰	総合せき損センター
2007	黒住　健人	高知医療センター
2007	菊池　克久	滋賀医科大学整形外科
2008	上島圭一郎	京都府立医科大学
2008	水野　直子	行岡病院
2008	金澤　博明	順天堂浦安病院
2008	渡辺　千聡	大阪医科大学
2009	浅田　卓	関西医科大学
2009	山本りさこ	広島大学
2010	塚本理一郎	湘南鎌倉人工関節センター
2010	奥村　法昭	滋賀医科大学
2011	久保田光昭	順天堂大学
2011	西脇　徹	慶応義塾大学
2011	斉藤　朝海	東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター
2011	金城　健	沖縄県立南部医療センター
2012	齋藤　正純	京都府立医科大学
2012	成尾　宗浩	東名厚木病院
2012	渡辺　新	高萩協同病院
2012	小池　洋一	仙台赤十字病院
2012	長谷川浩士	公立置賜総合病院
2013	野口　森幸	仙台赤十字病院
2013	相川　淳	北里大学
2013	高澤　誠	千葉大学
2013	市原　理司	順天堂浦安病院
2013	百村　励	順天堂大学
2013	二村　昭元	東京医科歯科大学
2013	越智　健介	東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター
2013	吉田　雅人	名古屋市立大学
2013	竹本　充	京都大学
2013	田村　太質	大阪府立母子保健総合医療センター
2014	江口　和	下志津病院
2014	深沢　克康	関東労災病院
2014	児玉　成人	滋賀医科大学
2014	荒瀧　慎也	岡山大学
2014	大槻　周平	大阪医科大学
2015	菊池　克彦	千早病院
2015	木島　泰明	秋田大学
2015	木田　圭重	京都府立医科大学
2016	藤城　高志	大阪医科大学
2016	岩田　浩志	あいち小児保険医療総合センター
2017	蒲生　和重	ベルランド総合病院
2017	岡本　純典	大阪医科大学
2018	迫間　巧将	尾道市立市民病院
2018	入村　早苗	東京都保健医療公社大久保病院
2018	林　和憲	大阪市立大学
2018	折田　純久	千葉大学
2018	田中　秀達	仙台赤十字病院
2018	井下田有芳	順天堂大学
2018	内田　勲	栃木医療センター
2018	田邊　智絵	昭和大学江東豊洲病院
2018	新谷　康介	大阪市立大学
2019	田中　秀達	仙台赤十字病院
2019	金澤　憲治	みやぎ県南中核病院
2019	岡崎　良紀	岡山大学
2019	平川　義弘	大阪市立大学
2019	岩井智守男	岐阜大学
2019	木澤　桃子	大阪医科大学
2019	前田　勉	滋賀医科大学
2020	西頭　知宏	自治医科大学
2020	萩原　茂生	千葉大学
2020	後藤　賢司	順天堂大学
2020	竹村　宜記	滋賀医科大学

5

これまでにフランスから交換研修医として来られた先生方と研修施設

年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LIVERNEAUX	京都府立医科大学・広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・滋賀小児センター・福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・東海大学・札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・新潟手の外科研究所・広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・岡山大学・国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2000	Olivier CHARROIS	京都市立病院
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・慶応義塾大学・高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・大阪市立大学
2007	Damien BREITEL	総合せき損センター・奈良県立医科大学
2007	Sybille FACCA	弘前大学・山形大学・京都府立医科大学・広島大学
2008	Thomas APARD	山形大学・大阪府立母子保健総合医療センター
2009	François LINTZ	京都市立大学
2012	Chihab TALEB	広島大学・山形大学・弘前大学・帝京大学・順天堂大学・順天堂静岡病院

6

寄附金を頂戴いたしました。
ご協力ありがとうございました。

株式会社松本医科器械

有限会社永野義肢

株式会社マティス

ビー・ブラウンエースクラップ株式会社

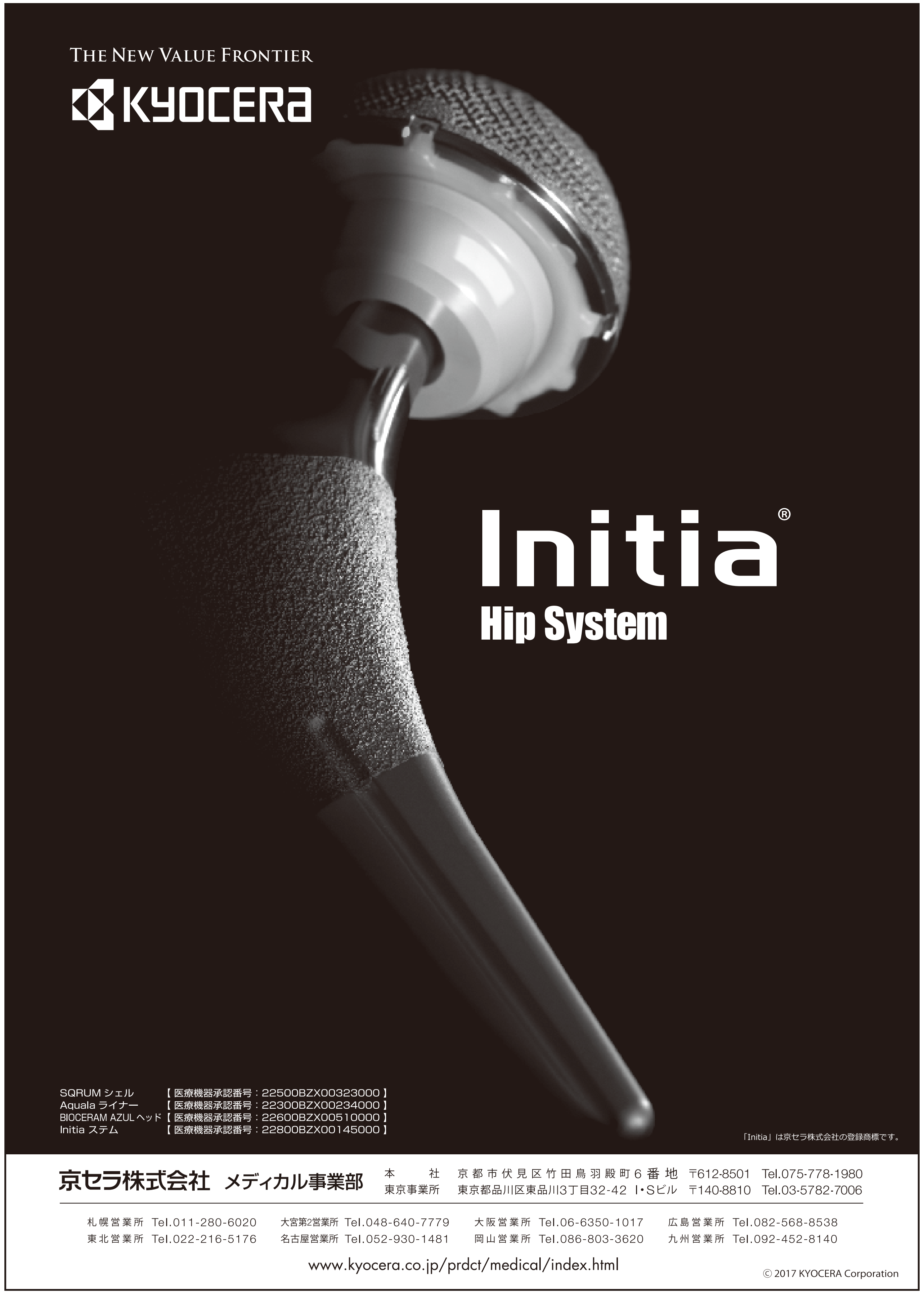
編集後記

Enchanté! 昨年から事務局のお仕事を始めさせていただきました前田勉と申します。大橋弘嗣先生から仕事を引き継がせていただいて半年が経過しました。初めてのINFOSも皆様のご寄稿のおかげで何とか発行に漕ぎ着けることができましたが、まだまだ慣れないことばかりで、会員の先生方にはご迷惑をおかけしております。私自身がフランス交換研修に行かせていただいたばかりの身で、日仏整形外科学会のことを目下勉強中です。なにぶん力不足ではございますが、諸先生方のお力を拝借しながら今後の任務を果たしていきたいと思っております。

幸いにも私のフランス研修は私の人生観を変えるほど素晴らしいものでした。（良くも悪くも）寛大・寛容なフランス人たちを見るたびに、逆に我々が住む日本社会について考えさせられました。また、フランスで生まれる自由な発想の手術の秘訣もここにあるのかもしれないとも感じました。まさに異文化を持ち、しかし、日仏お互いの文化を認めあえることができる彼らに接するなかで、私の彼らに対する興味と敬愛が膨らんでいきました。今後はこのフランス愛をエネルギーに変えて、日仏整形外科交流のお役に立てるように事務局およびINFOS発行の仕事に携わってまいりたいと思います。

今後とも宜しくご指導のほど、宜しくお願いいたします。

（前田　勉）



B|BRAUN
SHARING EXPERTISE

FIT JAPAN

日本にフィットした製品とサービスを
それが私たちの想いです。

販売名：
Trilliance ステム
プラズマフィット プラス システム

承認番号：
22100BZX00005000
22600BZX00541000

AESCULAP®
Trilliance & Plasmafit®

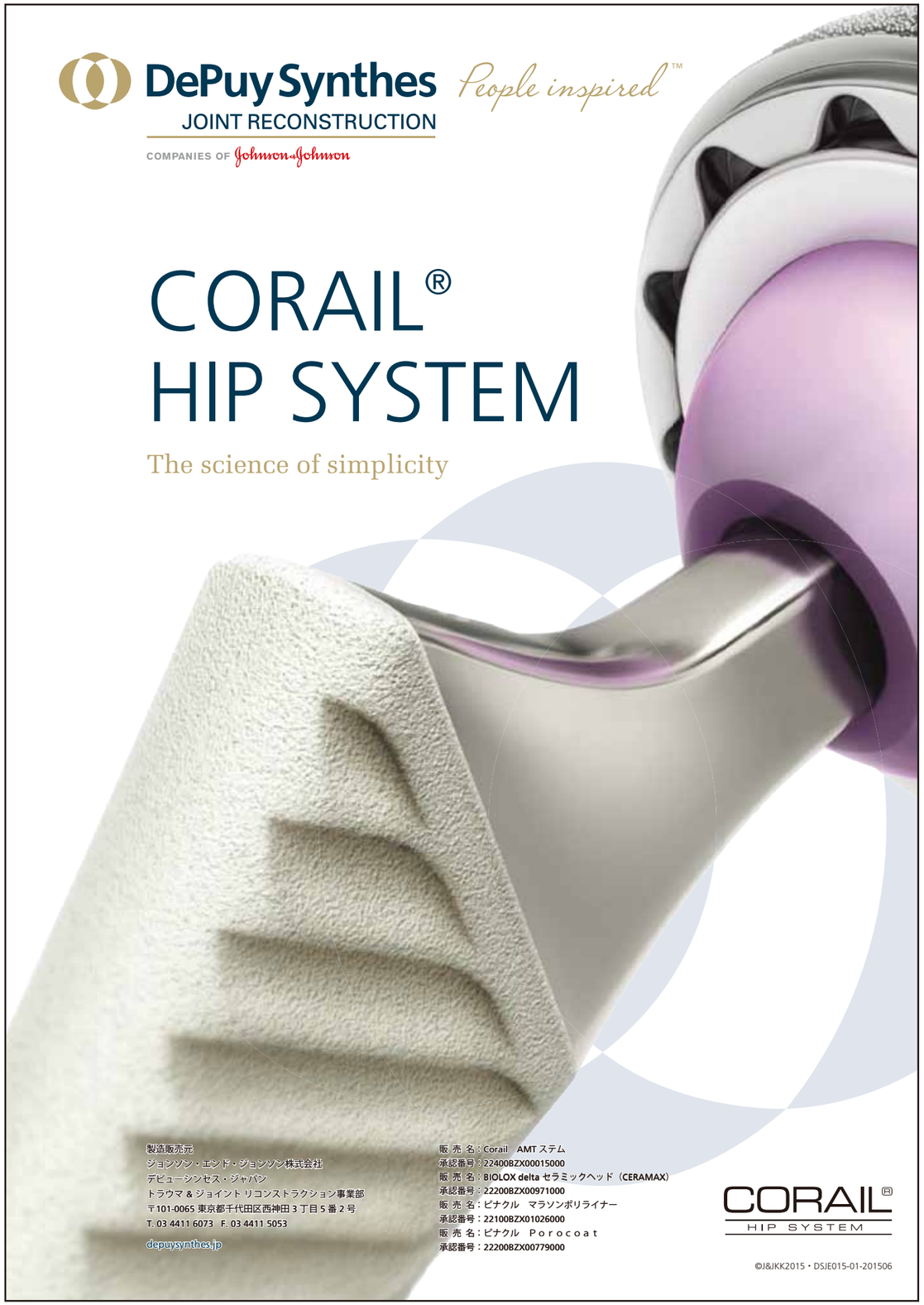
AESCULAP®– a B.Braun brand

製造販売元 **ビー・ブラウンエースクラップ株式会社**
〒113-0033　東京都文京区本郷2-38-16　TEL.03(3814)2524
カスタマーサービスセンター　TEL.0120(16)1743　FAX.0120(62)1108

DePuy Synthes *People inspired*™
JOINT RECONSTRUCTION
COMPANIES OF Johnson & Johnson

CORAIL®
HIP SYSTEM

The science of simplicity



製造販売元
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
デピューシンセス・ジャパン
トラウマ & ジョイント リコンストラクション事業部
〒101-0065 東京都千代田区西神田 3 丁目 5 番 2 号
T. 03 4411 6073　F. 03 4411 5053
depuysynthes.jp

販 売 名：Corail　AMT ステム
承認番号：22400BZX00015000
販 売 名：BIOLOX delta セラミックヘッド（CERAMAX）
承認番号：22200BZX00971000
販 売 名：ピナクル　マラソンポリライナー
承認番号：22100BZX01026000
販 売 名：ピナクル　Ｐｏｒｏｃｏａｔ
承認番号：22200BZX00779000

CORAIL®
HIP SYSTEM

©J&JKK2015・DSJE015-01-201506

Medacta International

Medacta Internationalはスイスに本社を置く、整形及び脳外科インプラントの開発・製造・販売を行っているグローバルカンパニーです。Medactaは**患者の生活の質を高める**ことをビジョンとして掲げております。

イノベーション、教育訓練の場を提供します。

AMIS Experience
ANTERIOR MINIMALLY INVASIVE SURGERY IN HIP REPLACEMENT

GMK SPHERE
MEDIALLY STABILIZED KNEE

MySpine MC
PATIENT MATCHED TECHNOLOGY IN SPINE SURGERY

MEDACTA SHOULDER SYSTEM

製造販売業 [許可番号:1381X10060]
メダクタジャパン株式会社
〒102-0083 東京都千代田区麹町5-3-5 麹町中田ビル
TEL 03-6272-8797　FAX 03-6272-8798

承認番号:22600BZX00321000
販売名:GMK SPHERE 人工膝関節システム
承認番号:22600BZX00327000
販売名:GMK セメンテッド人工膝関節システム

承認番号:22400BZX00479000
販売名:M.U.S.T. スパイナルシステム
承認番号:23000BZX00210000
販売名:MEDACTA 人工肩関節システム

承認番号:22800BZX00354000
販売名:MySpine PSガイド
承認番号:13B1X10060H0001
販売名:AMIS モバイル レッグポジショナー

承認番号:23000BZX00247000
販売名:MEDACTA 人工肩関節システム リバース型

MEDACTA.JP

© 2020 Medacta International SA. All rights reserved.
rev AE-002020

まだないくすりを
創るしごと。

世界には、まだ治せない病気があります。
世界には、まだ治せない病気とたたかう人たちがいます。
明日を変える一錠を創る。
アステラスの、しごとです。

明日は変えられる。
astellas
アステラス製薬株式会社
www.astellas.com/jp/

フォルテオ®
皮下注キット600μg
テリパラチド(遺伝子組換え)注射剤
骨粗鬆症治療剤
処方箋医薬品注) 薬価基準収載
注)注意－医師等の処方箋により使用すること

「効能又は効果」、「用法及び用量」、
「禁忌を含む使用上の注意」等に
ついては添付文書をご参照ください。

製造販売元(文献請求先及び問い合わせ先)
日本イーライリリー株式会社
〒651-0086 神戸市中央区磯上通5丁目1番28号

Lilly Answers リリーアンサーズ
日本イーライリリー医薬情報問合せ窓口
0120-360-605※1 (医療関係者向け)
受付時間 月曜日～金曜日 8:45～17:30※2
※1 通話料は無料です。携帯電話、PHSからもご利用いただけます
※2 祝祭日及び当社休日を除きます
www.lillymedical.jp

FRT-PA020(R1)
2019年10月作成

Lilly

肩外転装具　ケンバッグスリング

Kenbag Sling

- 左右兼用 & フリーサイズ
- 両肩支持 & 負荷バランス調整
- コンパクト & MRI 対応

ISO 9001　認証取得企業

必要とされるひとに　必要とされるものを　必要なときに…

クリニカルアドバイザー

株式会社 洛北義肢

〒603-8487　京都市北区大北山原谷乾町22-16
TEL. 075-462-0195　FAX. 075-463-2140
URL　http://www.rakuhokugishi.co.jp/

販売

株式会社 リハビテック

〒603-8487　京都市北区大北山原谷乾町22-16
TEL.075-464-0034　FAX.075-464-0044
E-mail　info@rehabitech.co.jp　URL　http://www.rehabitech.co.jp/

RehabiTech
REHABILITATION TECHNOLOGICAL CORPORATION

Lyon Hip System

tige fémorale à cimenter lisse

リヨン・ヒップ システム
セメントステム

- French design
- French Paradox theory
- CoCr.Alloy
- Polished Surface
- Triple Tapered
- Reduced Neck
- 137° Neck Angle
- 7 Sizes

［製造販売元］

帝人ナカシマメディカル株式会社

〒709-0625 岡山市東区上道北方688-1
TEL.086-279-6278　FAX.086-279-9510
URL:http://www.teijin-nakashima.co.jp

［販売元（資料請求先）］

Matsumoto AMPLITUDE
Motion for the Active life

松本アンプリチュード株式会社

〒113-0034 東京都文京区湯島4-1-11 南山堂ビル
TEL.03-3868-0711　FAX.03-3868-0722
URL:http://www.matsumotomed.jp
URL:http://www.amplitude-ortho.com/

ヒト型抗ヒトTNFαモノクローナル抗体製剤　薬価基準収載

シンポニー® 皮下注50mgシリンジ
皮下注50mgオートインジェクター

ゴリムマブ（遺伝子組換え）製剤
Simponi® Subcutaneous Injection

生物由来製品　劇薬　処方箋医薬品※
※注意－医師等の処方箋により使用すること

効能又は効果、用法及び用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等につきましては添付文書をご参照ください。

製造販売元（文献請求先・製品情報お問い合わせ先）
ヤンセンファーマ株式会社
〒101-0065 東京都千代田区西神田3-5-2
www.janssen.com/japan
www.janssenpro.jp（医薬品情報）

発売元（文献請求先及び問い合わせ先）
田辺三菱製薬株式会社
大阪市中央区道修町3-2-10

©Janssen Pharmaceutical K.K. 2019

2019年11月作成

GoldLine Orthopedics Retractor System

by Condor® Made in Germany

GoldLine
開創器システム

［製造元］

CONDOR® MedTec
EXPAND YOUR POSSIBILITIES

Dr.-Krismann-Str.15
33154 Salzkotten
Germany

Phone:+49(0)52 58-99 16-0
Fax:　+49(0)52 58-99 16-16
Web:　www.condor-med.de

［製造販売元（資料請求先）］

株式会社 松本医科器械

〒113-0034 東京都文京区湯島4-1-11 南山堂ビル
TEL:03-6801-8220　FAX:03-6801-8221
http://www.matsumotomed.jp/